

官能のプリマ

バージョン II

ピ ア ノ

アカマル

## 目次

1. ピアニスト	1
2. 歯科医	7
3. マスターベーション	11
4. 挑まれる性	16
5. 高まる期待	20
6. 官能の宴	28
7. 後始末	40
8. 逆さ吊り	43
9. 狂乱家族	50
10. 囚われ人	56
11. 海へ	63

## 1 ピアニスト

背後でドアが開いたことは分かっていた。

ピアノのペダルを踏む足元に冷たい空気が流れて来たし、静かにそっと近付いて来る人の気配も感じていた。しかし、僕が練習している「スケルツォ第二番変口短調」はエンディングに差し掛かっていたのだ。後ろを振り返っている余裕などはなかった。

思い切ってFを打鍵しようとした瞬間、耳元にふっと吹き掛かる息を感じた。暖房のきいたスタジオだったが、熱く感じられた息に戸惑い、僕はめちゃくちゃに音を外してしまった。

かっ顔中に熱が回り、真っ赤になった僕は、残ったフレーズをもの凄く速さで弾ききってしまった。

「素敵なショパンをありがとう」

拍手とともに耳元で、きれいなアルトが響いた。

どぎまぎして振り返ると、驚くほど近くに目鼻立ちのくっきりした女性の顔が見えた。

彼女は暖かそうな微笑みを浮かべ、手を差し伸べて来た。

「ミスっちゃって、すみません」自動的に言葉を繰り出し、差し出された手を握り返した。気分はもう完璧にピアニストだった。ミスタッチはあったが、とにかく今日の演奏は気に入っていた。演奏を認められたことで、胸の鼓動がおかしいほど高く鳴り響き、それを彼女に聞かれてしまうことだけを気にした。

トラッドなスーツに身を固めた彼女はとてもシックで、大人の女の雰囲気嫌になるほど見せ付けていたのだ。

「君の音楽をもっと聴かせてもらいたいんだけど、先生にも会いたいと思っているの」

「先生は今日、もう戻っては来ません」

「そう、困ったなー。君は先生の生徒なのかな。ミニコミ紙に載せるコマーシャルのことなんか、聞いてはいないよね」

「知りません。編集の方なんですか」

「編集はこういうことはしないの。私は営業で来たの。君にとっては皆同じようなものかも知れないけれど、業界の中ではずいぶん違うんだよ」

なれなれしい言葉遣いだったが、不思議に嫌悪感はなかった。

「まっ、また顔を見せるから、先生によろしく言っといてよ」

ぞんざいに言ってから少しの間沈黙し、自分の存在を強く印象付けた後、おもむろに言葉を続けた。

「もし差し支えなかったら、音を外さないスケルツォを聞かせてくれない」

彼女の一言で、あれほど気に入っていた演奏が急にみすぼらしく思え、無様な音を聞かせたまま帰すわけには行かないと思った。むろん渡りに船の心境だ。

僕は大きく深呼吸してから、スケルツォを曲芸のように弾き始めた。不思議と音も外さず、僕自身のリズムも守ったまま、曲はエンディングへとなだれ込む。

最後のDesを、ずっと全身で、気分良く置いた途端。

「ヴラヴィッシモ」と声が掛かった。

冬のさなかに全身から汗を流し、顔を真っ赤にさせた僕の頬に、彼女の唇が触れた。頬に幾つものキスされた後、逃げるようにして避けた唇に、彼女の唇が重ねられた。鼻先に突き出された唇のルージュは、多分ゲランだった。恐らく、熱くなった彼女の身体から漂う香りもまたゲランだった。

僕は、唇に合わせられた柔らかな感触を艶めかしく感じながら、母と同じゲランの香りを二度嗅いでいた。ペニスが熱く、むらむらと勃起してきていた。

「うっー」

突然低い声を上げた彼女が、床に屈み込んでしまった。オーバーな身振りにあっけにとられ、気が動転してしまった僕も、いつまでも起きあがらない彼女が心配になって屈み込んだ。腰が下りきる瞬間、彼女の手が股間に伸び、勃起したペニスをつかんだ。

「何をされるんですか」と声を荒立てると、

「歯が痛いよ」と、のんきそうなアルトで甘える。

「そんなに歯が痛いのなら、歯医者に行かなければだめですよ」と勧めると、「君はピアニストだと思っていたが、歯医者 of 回し者なのか」と毒づく。

見ず知らずの、初対面の女に絡まれては、かなわないなと思っては見たが、これも行き掛かりのサービスだと考え直し、我が家の営業活動を開始した。

「僕の父は歯医者なんです。良かったらうちで診察を受けませんか」

「へー、ピアニストの父はデンティストなんだ」と、はすっぱな言い方でいたずらっぽく僕を見る。

目が合った途端、再び痛そうに顔をしかめた彼女は、

「事のついでに案内してもらおうかな。でも私は、保険証は持っていないよ」と言ったのだ。

悪い客を捕まえてしまったと後悔したが、結構父といい勝負になるかなと考え直し、案内することにした。

「でも、このスタジオを開けばなしにしておいていいの」

似つかわしくない常識的なことを言う彼女に、僕は心の中で笑ってしまった。

「別に、留守の間に泥棒が入っても、あなたの広告料がパーになるくらいの損害しかないんじゃないですか」

「君はなかなか賢いね。ピアニストにはもったいないくらいだ。それに、大人をからかうのも得意みたいね」

「別にからかってるわけじゃあないけれど、あなたは普通の大人とはちょっと違うみたいだ」

「多分、私は君の将来のために、大人のあり方をよく説明した方がいいのかも知れないけれど、歯が痛くて仕方がないから、とにかく、君の推薦する名医のところへ早く案内してちょうだい」

彼女は話し掛けながら立ち上がり、片手に持っていたシェラデザインのマウンテンパーカーに袖を通し、外に出て行こうとする。

随分せっちな女だと、あきれ返って後に続くと「お揃いのパーカーだね」と前を見たまま言った。

確かに、彼女はタンで僕はグリーン。色違いの揃いのパーカーだった。

玄関を開けると真ん前に凶々しく、真っ赤なユーノス・ロードスターが駐車してあった。しかも、この寒いのにオープンにしてある。道理でマウンテンパーカーを着込んだわけだ。彼女を案内するのは、並の仕事では済みそうにない予感がした。うれしい予感について、口元が緩んでしまう。

「何をにやにやしているのよ。早く乗りなさいよ」

僕が乗り込むとすぐ、凄い速度で急発進する。行き先も聞かなければ方向も確かめはしない。

メインストリートの車の流れに、強引に割り込んでから「どっちに行くの」と、子供みたいに聞いた。

「山地に行ってください」と答えると、急に車のスピードが落ちた。

一瞬の重い沈黙の後、スピードが上がり、対向車が途切れた瞬間を突いて鋭くUターンした。

「反対方向ですみません。でも、凄い運転ですね」

「ピアニストの家は山地なのか」

彼女は独り言のようにつぶやいたきり黙り込み、よく知った道をドライブするようにスムーズに運転する。交通量が少ないのに、遅すぎるとさえ思われるほどにしっかりと、制限速度を守って走る運転が不思議だった。

山地という言葉が引き起こした不自然な沈黙に驚き「意外に安全運転なんですね」と、気を引くように尋ねると、

「捕まれば懲役三年だからね」と、わけの分からぬ返事が返ってきた。

せいぜい罰金と免許停止ぐらいな事は僕も知っていたが、聞き返すことがためらわれてしまった。

「君は、山地の古い家を知っているかな」

突然彼女が聞いた。多分あの、主人が自殺したことで騒がれた築三百年の家のことだろうと思ったが、

「知りません。僕の家はそんなに山奥ではないんです。あなたの言っている家は多分、昔林業で栄えた山林地主の家だと思うけど、僕の家は代々材木商をしていたんです。だからずっと手前にある」と答えてしまった。

「そうか、ピアニストの家も資産家なんだ。商売を嫌ったおやじさんが、歯医者になったってわけ」

「いいえ、父は婿なんですよ。資産家なのは母の方で、父は半ば趣味で歯医者をやっている」

再び会話が弾むようになったが、僕は身元調査をされているような不快感を感じた。しかし、積極的に家庭内のことを話しているのは僕なのだからあきれる。「ミニコミ紙の営業は長いのですか」と話題を変えると「昨日からやってる」とにべもない返事だ。

「私は二十七歳だけど、ピアニストは幾つ」

「十八」

「へー、高校三年生か。ずいぶん余裕があるね、歯医者受験勉強はしなくていいの」

「あなたは営業だけでなく、説教もするんですか」

「ごめん。怒らせてしまったかな。確かに、私の知っている君はピアニストであって、受

「験生ではないものね。余計なことを言っでごめんなさい」

急にしおらしいアルトが口を突き、僕をどぎまぎさせる。追い打ちを掛けるように「君のペニスは大きいんだね」と続けた。

寒い風にあおられる頬が真っ赤になってしまい、先ほどペニスをつかまれた感触が甦り、またむっと勃起し始めていた。

「勃起してくれたんだね」

「下ろしてください。もう嫌ですよ」

「怒らなくてもいいでしょう。事実なんだから。私は嬉しく思っているのだから、恥ずかしがる必要なんてないじゃないの」

「でも、初対面で交わす会話だとは思えませんよ」

「君はペニスみたいに、かちかちに固いんだね。私だって大人なんだから、人を見て話をするわ。君は見くびられたと思うわけ」

「いいえ」

「私は女として、男の君に話し掛けているのよ。それとも、女と性の話をするのは嫌いなのかな」

とんでもないことになったと僕は思った。もちろんピアノと同様、性にも強い関心はあるし、毎晩のようにマスターベーションもしている。しかし、大人の女から露骨に性の話をされても困る。まるで誘惑されているようじゃないか。

「私は、ピアニストを誘っているのよ」

運転しながら僕の方を向いて、ゆったりとしたアルトを響かせた彼女の目をじっと見つめた。

絡み合った二人の視線がスパークし、股間で膨れ上がっていたペニスが暴発した。暖かい液体が腿の付け根に広がっていく感触が、とにかく不快だった。

そんな状態に気が付いたのか、付かないのか。ちょうど差し掛かった溪谷浴いのカーブで、彼女は視線を前方に戻し、大胆にハンドルを切った。

僕は射精したことを気付かれてもいいと思った。きっと、彼女も喜んでくれるはずだと思ったのだ。ほんのちょっとの時間しか経っていないのに、僕は大した変わりようだった。ピアノも性も、個人教授でなければ上達しない。

僕は晴れやかな気分になって、オープンの車内に吹き込む寒い風に向かって、わっと大きな声を上げた。

隣で運転する彼女が、くすっと笑ったような気がした。



## 2 歯科医

溪谷沿いの道をしばらく上り、最初の集落が始まってすぐ、左折するよう大きな声で伝えた。

「割と近いんだね。いいところね」

辺りを見回しながら彼女が答え、鋭い角度でハンドルを切った。

溪谷に注ぐ小さな疎水沿いに五軒並んだ家の、真ん中にあるのが僕の家だ。山地の例に漏れず塀など掛かっている。疎水に沿って二十本の梅を植え、その中央を広く取って、橋を渡してある。二メートルの橋の先はもう庭になっていて、雑多に植えた樹木の間に、現在の住居と昔の母屋、土蔵や離れが点在している。昔の母屋は現在、診療所に使っていた。

「どの建物も、古いものは優雅な作りね。ここで商売もしていたの」

「材木商は市内でしていたらしいですよ。ここはいわゆる自宅ですよ」

庭の奥まで車を乗り入れ、母屋の前で停車した。

「ベンツと比べると、この車はみすばらしいね。でも、この可愛らしさがたまらないんだよね」

父のベンツの隣に止めたロードスターの低い座席で、豊かな胸を突き出して彼女が言った。

もちろん僕も同感だった。やくざではあるまいし、シルバーのベンツなんて、父も趣味が悪すぎた。

「ひょっとして歯医者さんは、金ぴかのロレックスをしているんじゃない」

「本当に怒りますよ。でも、父の腕時計は十八金のオメガだったから似たようなものです」

「ぴー」と品悪く口をならした彼女は、意地悪そうな目をして僕に顔を寄せた。「このまま帰っちゃおうか。君のおやじさんは、私の虫歯にきつとダイヤモンドを詰めるよ」

「またっ」と言って、シートベルトを取ってドアを開けた僕の目に、アップになったガラスの揺らぐような赤が残り、冬枯れの景色が、一瞬ピンクに染まった。

「診療所はこっちですよ」と、先に立って案内しようと車の長いノーズを足早に回り込む。

いつの間に車を降りたのか、梅の木の前で長い足を見事に大きく開いた彼女が、足の間

から逆さまになった顔を見せてウィンクしている。

悪いことに、パーカー越しに見える形の良いヒップの上に、こちらへ歩いて来る母の姿が見えた。

逆さまのまま、にやっと笑ってから、勢いよく直立した彼女と母は正面から向かい合った。

「僕の母です」と大きな声で、彼女の背にフォローを入れた。

「おはようございます。見事な梅がよい香りですね」

「いらっしゃいませ。失礼ですが、子供の先生でしたでしょうか」

日暮れ近くなって「おはようございます」もないもんだし、咲いてもいない梅を褒める者など、いるはずもない。

母も困ってしまって、高校の教師にしてしまいたいらしかった。若い女性が男子学生の前で大きく脚を開き、後ろ向きになって股から顔を出すようなことは、学校のレクリエーションの時間以外には有りそうもなかった。僕は、話の分かる先生を連れて来たような表情を作り、即座に母と彼女の間に割って入った。

「急に歯が痛くなってしまったので、チチに診てもらおうと思ってお連れしたんだ。ところで、ハハはどこかに出掛けるの」

「まあ、こんな山奥まで治療に来てもらったの。ご迷惑掛けちゃだめじゃない。ハハはこれからお花の稽古」

母は彼女に軽く会釈して、ベンツの方に向かった。

多分、彼女が教師でないことはお見通しだ。フロントガラス越しに僕たちを強い視線で見て、ベンツで去って行く母を、立ち止まったまま無遠慮に見送っていた彼女が、素早く隣に並んだ。

「ピアニストは両親を面白い言い方で呼ぶんだね。へー、チチにハハか。分かりやすくもいいね。誰の方針だったの」

「多分、チチの方針ですよ」

「へー、ベンツ・ロレックスも案外趣味がいいのね。帰らなくて良かったみたい。早く会わせてくれる」

「すぐ会わせますよ。でも、さっきのハハの場合もあるし、あなたをなんと紹介すればいいのだろう」

「あんたも馬鹿ね、営業のMでいいじゃない」

まことに話は簡単だった。既に歯痛もなくなってしまうらしい、妙に浮き浮きした彼女を連れて、診療所の前に立った。

「本日臨時休診、急患の方は土蔵にどうぞ一か。歯医者さんは質屋を始めたみたいだね。ますます帰れなくなってしまった。ぜひ、診てもらわなければ、本当に虫歯になってしまいそうだ」

まったく、と僕は思った。彼女も彼女なら、つまらない張り紙をしている父も父だった。「患者さんが途切れると、土蔵で和紙を漉いているんですよ。チチの唯一の趣味なんです。家族の間では土蔵ではなく、蔵屋敷と言っています」

「へー、蔵屋敷ね。でも、ピアニストの言うことは怪しいからね。さっきは歯医者趣味だって聞いた覚えがある」

「みしめて営業活動をしないと言う意味だったんです。腕はいいんですから」

「むきにならなくてもいいのよ。決してチチを軽んじているわけではないの。むしろ、素敵な生き方だなんて思っているわよ。早く、蔵屋敷に連れてって」

なぜか僕は、彼女を父に会わせたくない気がしてきていた。

別に予感というほどのことではなかったが、せつかく僕の音楽を機会に知り合えた大人の女を、大人の父に取られてしまいそうな気がしたのだ。まるで、隠しておいた子猫を取り上げられてしまうような、幼いころの不安な気持ちが甦り、どことなく居心地が悪い気分になったのだった。そんな僕の気持ちにお構いなく、彼女はさっさと蔵屋敷の方に向かって行く。

「驚いたね。土蔵のドアが自動ドアになっているんだ。だから蔵屋敷って呼ぶのかな」

振り返りながら彼女は、ドアのセンサーに大きく身体を晒した。さっと開くガラスドアへと、後ろにいる僕を見ながら一步を踏み出した彼女は、ちょうど出て来た父と鉢合わせしてしまった。

間の悪いことに父は、紙漉きに使う糊を入れたバケツをぶら下げていた。二人がぶつかった拍子に糊が飛び散り、彼女の身体と、父の身体に飛び散ってしまった。二人から少し後ろにいた僕は、辛うじてセーフだ。

「ずいぶんねばねばしたシャワーをありがとう」

彼女の自意識はもう、完璧に言うことはない。

「水も滴るほどいい女という言葉はあるが、糊に固められる美女はそれ以上に魅力的です」

父も負けてはいない。僕が危惧した大人の時間が始まってしまいそうだった。慌てて二人の間に入り「Mは歯が痛いんです」と、とんまなことを言ってみたが、父と彼女は、僕の目にも怪しく見えるほど親密に、お互いの目を見つめ合っていたんだ。

「どうぞ、中へお入りください」

父が少女漫画のヒーローみたいに腰を引いて右手を曲げると、彼女も大きく胸を張って、まるで王女様みたいに「はい、先生」と答えたのだった。

僕はまるで立場がなく、目の前で閉まった自動ドアの前で、これから何をなすべきかを、深刻に考えなければならなかった。

何となく中に入って行くのもためらわれ、なんと十分間ほどもドアの前でうろうろした末、僕は諦めて自分の部屋に帰った。

### 3 マスターベーション

僕の部屋は、母屋の南側の一階の奥まった角にある。

なんとも整理できないもやもやとした気分を抱いて、部屋に入るなりドアをばたんと閉め、壁際のアップライトのピアノに向かった。

煮えたぎるような、向けようのない怒りを吐き出すように、スケルツォの二番をもの凄いい速さで乱暴に弾ききる。「ヴラヴィッシモ」と言う彼女の賞賛の声は今にも還って来るような気がして三回弾いてみたが、虚しく、なぜか悔し涙が情けなく頬を流れた。

恐らく蔵屋敷か診療所に、父と二人でいる彼女の耳に届けとばかり、全音フォルテッシモで弾ききってみたが、完全に防音された部屋に鳴り響いたぼろぼろのショパンは、いたずらに耳をいたぶるばかりだった。

流れた涙に更に感情を煽られ、疲れた腕と指、全身の筋肉を憎悪したとき、痺れきった耳と霞む視界に、暗くなった外の風景が侵入して来た。

僕はピアノの蓋をばたんと音を立てて閉め、ヒーターのスイッチを消した。セーターを脱ぎ捨て、シャツを脱ぎ、ジーンズまでも部屋の隅に投げ捨てた。コバルトブルーのセミビキニのパンツだけの姿になり、窓際に立つ。黒いガラスに映る汗の浮いた身体を見て、熱くなった裸身を更に熱く感じたとき、僕はパンツを脱ぎ捨てていた。

窮屈な布の下でテントを張っていたペニスが、解放された嬉しさに、ぐっと天を向いて反り返っている。肉の柱を流れる、どくどくと漲った熱すぎる血液の鼓動が聞こえ、張り切った静脈が怒張した褐色の皮膚の上で脈打つ。

僕は外の暗がりバックに、美しい鏡となった二面の窓ガラスを交互に見ながら、誇らしいほどに怒張したペニスに両のてのひらを当て、力の限りしごき上げた。思っていたほどの快感はなく、騙されたような日常だけがひたすら、勃起したペニスの表層を流れていた。二面の窓ガラスに映る、ペニスをしごき上げる両手が醜く卑猥だった。せっかく遅くそそり立ち、怒りの自己主張をするペニスを、自分の目で見て納得したかった。僕は両手を後ろで組み、ペニスを窓に向かって突き出した。狂おしく尻を前後に振り、交互に太股を高く上げ、自分自身の腿でペニスを撫でさすった。

急激に高まる快感を何度かやり過ぎ、ついに視界が真っ黒に暗転したとき、全身の震えとともに僕は射精した。きれい好きの僕はいじましくも、射精の瞬間に両手をペニスに

伸ばし、白濁した精液をてのひらに取っていた。

あれほど見たかった勇姿は見ることもできず、今、目の前の窓ガラスに、痴呆のように放心した、無様な僕が映っている。

そのとき、窓ガラスを叩くコンコンという音がした。

瞬間、全身がカッと熱くなり、限界にまで見開いた目で窓を凝視すると、意地悪っ子みたいに、あかんべーをしている彼女の大きな顔が、網膜に鮮明に焼き付いた。

大慌てで電気を消し、捨ててあったパンツを穿く。無理矢理両足をパンツに突っ込んで足がもつれ、頭から床に倒れてしまった。痛みに耐えきれず僕は、大きなうめき声を立ててしまう。素っ裸のまま、全身でパニックに陥っている耳に、彼女の朗らかな笑い声が幻聴のように響いた。

頭の中が全て空白になり、しばらく横たわっていた僕の耳に、今度は明瞭にロードスターの低く太い排気音が聞こえ、遠ざかって行った。

彼女に一部始終を見られたと思い、恥ずかしさに全身を赤くして暗い部屋の中央に座り込んだ。きつく目をつむって激しく頭を振ってみたが、あかんべーをした顔と朗らかな笑い声が、脳裏を占めたままで決して消え去ろうとしない。

なぜ彼女は、母屋の隅にある僕の部屋の前まで来たのか、なぜ僕の部屋を知っていたのか。彼女は父に歯の治療をしてもらい、そのまま帰るのではなかったのか。案内して来た僕に挨拶するなら、父を通してすればいいのだ。と思った瞬間、父の顔が頭に浮かんだ。「チチの仕業だ」と、僕はうめき声を出した。父が僕の部屋を教え、訪ねてみるように言ったに違いなかった。しかし、部屋の外から唐突に回り込んで来るなんて非常識もいいところだ。それにもう暗くなっていたのだから、若い女のすることではない。いかにも常識的で優等生的に非難してみて、はたと思い当たった。所詮彼女は僕の常識など通用する相手ではなかった。そう思ってみて僕は、やっといくらか気分が楽になった。

二人に対する怒りは静まってきたが、恥ずかしさだけは消えることもなく、何度も繰り返し、波のように大きくなったり小さくなったりして襲って来た。その度に萎んでいたペニスまでがムクムクと、大きくなったり小さくなったりしたのだから恥ずかしさに拍車が掛かった。

確かに僕のペニスは、彼女につかまれたことがあったし、不用意に勃起したことも喜んでくれたのだ。しかし、狂ったナルシスのようにマスターベーションに耽る姿まで好ましく思ってくれたと、うぬぼれることはできなかった。

「まあ、二度と会うこともないんだから」と慰めてみたが、却って悔しさがつのる。せっかく知り合えた素敵な大人の女を、手放したくはないというスケベ心が見え見えで、やけに情けなくなる。

「えいっ、ままよ」と聞き直ってパンツを脱ぎ捨て、電気をつけた。

眩しさに目をしょぼしょぼさせながらピアノの前に座る。素っ裸のままペニスを直立させ、スケルトンを弾き出す。音色もリズムも知ったことではない。ペダルも使わず、両足を高く上げ、打鍵しながら両腿でペニスを愛撫する。僕のスケルトンが僕の官能を隠微に盛り上げるのだ。

最後のDesをメロメロになって置いたとき、ヒリヒリする亀頭の先からシュッとまた射精した。「ごまーみろ」と僕は思い、鍵盤の上まで飛んだ精液を身体を屈めて舌で舐めた。塩辛い味が舌を刺し、生臭い臭いが鼻を打った。僕は別にピアノを神聖なものとも思っていないし、音楽をしていくことに、家族の誰かが賛成していないのだから別に構わない。僕の性で彩ったピアノとショパンをぜひ、見ることもない観衆に見てもらいたくて、僕は性にまみれた裸身を傲然と反り返らせ、黒いガラス窓に映った自分自身の目を睨み付けた。

急にドアがノックされ「ご飯ですよ」と言う母の声が聞こえた。もはや何をするにも遅すぎる時間が瞬間に流れ去り、ドアが大きく開け広げられた。

「まあ」と言ったまま絶句した母はドアを閉めればいいものを、ぼかんと口を開けたまま顔全体で驚愕している。

まったく困ったもんだと思いながらも、妙に落ち着いた低い声を作り、萎んだペニスを見られないように身体を斜めに構えて「ドアを閉めてよ」と言うと、びっくりしたことに母は、一步部屋の中に入るや後ろ手にドアを閉めたのだった。

もう、落ち着いた表情を作っている場合じゃあない。

「何か用なの。早く出ていってもらいたいんだけど。ご覧の通り取り込み中なんだから」

「そんなこと見れば分かりますよ。別にあなたはもう大人なんだから、自分の部屋で裸になって何をしようよ、ハハは干渉する気はないわ。でも、わざわざあの女を連れて来た後で、そんな格好をしてほしくないのよ」

「何のことを言ってるの。あの女ってMのことかな」

「あなたからは確か、学校の先生のようにしか聞かせてもらっていなかったはずよ」

「それはハハが勝手に誤解したことで、僕には責任ないと思うけどな」

「責任も義務もないわよ。あれほど山地を騒がせた犯罪者と仲良くして、のぼせ上がられたんじゃあ心配で眠れなくなってしまいますよ。それにこの始末なんだから呆れ返ってものも言えないわよ」

十分にもものは言っていると思った。しかしそのとき、回転の遅い頭の中で、一年ほど前に山地をにぎわせたニュースと、先刻Mが言った懲役三年という言葉が渦を巻いた。僕はまた全身が熱くなるのを感じ、母の目の前でまた勃起しそうになって慌てた。

「とにかく服を着たいんだけどな」と、かすれた声を出すと、母はこれ見よがしに大きく溜息をついて部屋を出て行ってしまった。

僕も隅のベットに全裸のまま身を投げ出し、大きく溜息をついた。やっぱり親子は似ているなどと詰まらぬ事を考えながら、一時期セックススキャンダルとして有名になった、築三百年の屋敷で起こった事件のことを思い起こした。

あの事件は学校でも地域でも、大きな声で言えない猥褻な裏話とともに、格好の暇つぶしをしばらくの間提供したのだった。ことに、母の華道の先生が屋敷の主の妻と親しかった関係で、母の情報は群を抜いていたはずだった。

「そうだったのか、彼女があの有名な悪女だったのか」とつぶやいて、また大きく溜息をついた。

当時彼女の名は、一種名指しがたいセクシーなイメージとともに悪女の代名詞として、僕たち少年の話題にも上っていた。それはもう地元のスターというより、音楽好きの僕にとっては、オペラのプリマのように遠くきらびやかな怪しい存在として、性的に身近に感じられていた。確か、性の饗宴のさなかに少女を殺し、その罪に狂った屋敷の主が自殺したはずだった。その惨劇から一人生還したプリマは、少女の死体を捨てようとした罪で裁判に掛けられ、有罪になったと語られていた。しかし、噂はそこまでだった。プリマが服役したのか、執行猶予になったのか、誰も関心がなかった。ただ、セックスの権化として、悪女のイメージだけが人々の記憶に残った。

僕は、その悪女の実物を見てしまったのだ。見るぐらいならともかく、あのセックスの達人にペニスまでつかまれてしまっている。ひょっとして、母の心配もあながち、的外れではないのかも知れなかった。

ベットに横たわったまま、ぬらぬらと精液に粘るペニスに、つい手を添えながら、僕はMのことを思った。ここでまた射精してしまうともう、今日は四回目の射精だった。しか



し過去と現在を駆けめぐって、悪女の記憶が僕を異様に高ぶらせる。性懲りもなく僕は、ペニスに当てた手に力を加えた。

身も心も疲れ果てながらも、抗うことが出来ない官能に焼かれるように、ヒリヒリとするペニスを痛めつけると、父のことが頭をかすめた。

ざっと考えて二時間以上を、父と彼女はどのように過ごしたのか。Mの訴えた歯の痛みから考えて、それほどの治療時間が必要とは思えなかった。

そして、母から僕と彼女のことを、事件の記憶とともに聞いたであろう父は今、彼女のことをどう思っているのだろうか。

親密そうにMと目を見交わしていた父の顔が甦り、僕はその映像を振り払うようにペニスを苛め続け、いつになく苦しい四回目の射精を力無く両のてのひらで受けた。

#### 4 挑まれる性

今日のスタジオは暑い。きっとエアコンのスイッチを強にしたまま先生が出掛けてしまったに違いない。

ピアノの発表会を目前に控え、先生は慌ただしい。出張教授の回数が増えている。しかし僕にはおあつらえ向きだった。きっと最後の発表会のプログラムになるに違いない今回のショパンを、こころいくまでフルコンサートのグランドピアノで練習できるからだ。僕の部屋のピアノはヴェーゼンドルファーだが、アップライトではどうしても響きが不満だった。それに、スケルツォの二番は、何よりも音色を重視して弾きたかったのだ。

四月から、したくもない歯医者勉強をすることになった僕は、ピアノを職業に選ぶことを断念していた。母に無様な裸を見られた僕に、歯大への推薦入学を断れるガッツはなかった。また、今の練習レベルでは、感性だけは誇れても、超絶技巧が求められる音大受験を乗り切ることは出来なかったのだ。

思うように行かないすべてのことを忘れて、思い切ってFの音を置こうとしたが、見事に外してしまった。部屋が暑いせいだと思い、立って行ってエアコンのスイッチを切る。

「ヴラヴィッシモ」と言う懐かしいアルトが、背中に聞こえた気がして振り返って見たが虚しく、いつか外した音にまつわる甘い記憶がペニスを勃起させるばかりだった。

今度は丁寧に、音を外さないようにテンポを下げ、ゆっくりと弾く。

弾いていてもつまらない、貧弱なショパンになってしまった。

「おくびょうなショパンなんて聞きたくない」

背後から本当に声が掛かった。

うれしさを隠し、幻聴ではないかと、何気なさを装うようにルーズに振り返ると、彼女がいた。

Mはこの前と同じように颯爽と立っていたが、魅力的な笑顔は見せていない。いくらか悲しそうな目をして僕の顔を見つめた。

「ピアニストは死んでしまったんだ。つまらないショパンは聞きたくないわね」僕はむかついて「あなたに聞かせるためのショパンではありません」と強い口調で言った。

大きくうなずいた彼女は、微笑みながら「では、私に聞かせるショパンを弾いてくれ

る」と言ったのだ。

僕は天にも昇る気持ちで、彼女にまつらう恨み辛みや、淫らな感情までを込めて、もの凄く速度でスケルトンツォを弾ききってやった。しかし「ヴラヴィッシモ」の声はなく、振り返って見た彼女の顔には、頬に二筋の涙が流れていた。

「そんなに私が嫌い」

Mの言葉に激しく首を振って立ち上がった僕は、彼女に飛びつくやいなや、豊かな胸に顔を埋めて泣いた。

長い時間泣いている僕の身体を、Mが両手で撫でさすってくれる。股間で止まった手が優しくペニスをまさぐり、勃起した亀頭の先で踊る。ファスナーが下ろされ、屈み込んだ彼女がペニスを外に出して口に含む。その瞬間僕は射精し、彼女の舌先が激しくペニスの先を這った後、喉の鳴る音を聞いた。

もう僕には言うこともない。ファスナーから突きだした、勃起したままのペニスを振り立て彼女の顔中、なで回した。

「素敵なショパンだったけど、私のいる場所がなかったのよ。やっと私のいる場所を作ってくれてありがとう」

僕はただ、彼女の熱い言葉にペニスをすり寄せて応えるばかりだった。

「もう、私のことは知っているのでしょうか」とMが言った。僕は小さく首を振って跪き、彼女の顔に頬をすり寄せてから、強く口を吸った。彼女の舌が僕の舌に絡み、強すぎる麻薬のように官能の嵐が再び下半身を貫いていった。

「泣かなくてもいいのよ。ピアニストのペニスはチチのペニスより、ずっと遅しくて大きいのだから」

予想外の言葉を聞いた僕は即座に身を固くし、Mの目を見つめながら「チチともこんな事をしたんですか」と問いただした。

「もちろんしたわよ。いけないことなのかしら。歯医者さんもあなたと同じように素敵な男よ。どうしてあなたが気にするのか分からないわ」

「でも、やはり僕のチチなのだから気になってしまう」

「ピアニストは歯医者さんにやきもちをやいているわけ、それとも自分のチチが魅力的でない方がいいと思っているわけなのかしら」

僕は答えに窮し、ただ両目から涙を流し続けたまま彼女の穏やかな目を見つめた。

「ピアニストもその父もどちらも魅力的な男よ。私は二人とも、とっても好きよ」 Mは

男という言葉が二回使った。その言葉は僕の自尊心を十分に満足させ、父と同じ地平に立てたことに喜びさえ感じ始めていた。

「さあ、もう泣かないで、もう一度私のためのショパンを聞かせてくれる。ピアニストとしては最後のショパンになってしまうのでしょうか」

「どうして知っているんですか」と尋ねると「歯医者さんに聞いたわ」と平然と答える。

軽いショックを感じたが、もうあれこれ考えても仕方がないと思って立ち上がった僕の、ズボンのファスナーをさり気なく上げてくれた。

ピアノの前に座り、今の気分のまま弾けるだろうかと思い、隣にたたく彼女の顔を見上げて問い掛けてみた。

「ひとつき前、歯の治療で家に来たとき。暗くなってから、僕の部屋の外にいたでしょう」

「いたわよ」

「何か見ませんでしたか」

「何を馬鹿なこと言ってるの。あなたは素晴らしい裸を見せて真剣にマスターベーションをしていたじゃない。余りに、ひたむきなので声が掛けられず、歯医者さんも困っていたから、私が窓を叩いてあかんべーをしてやったじゃない」

僕は呆然として大きく口を開いてしまった。あの夜、窓の外には彼女だけではなく父もいたのだ。二人してマスターベーションの一部始終を見ていたなんて、あんまりのことだった。急に全身が熱くなり、頬が真っ赤に染まるのが分かった。

「何を気にすることがあるの。私たちは覗きに行ったわけではないわ。余りにもあなたが真剣だったので声を掛けそびれただけじゃない。そんなに赤くなる必要はないわ」

「必要があって赤くなっているんじゃないですよ。恥ずかしくて仕方がないんです」

「何だ、恥ずかしがっていたのか。私は、あかんべーをしただけで帰っちゃったから怒っているのかと思った。気持ちは良く分かるけど、恥ずかしがる事なんてないのよ。マスターベーションなんて誰でもするんだから。私もする。でも、あなたのように真剣にすることは素敵な事よ。真剣に生きているって事なんだから。さあ、ショパンを聞かせて」

僕の経験不足の頭脳では何がなんだか分からなくなってしまい、そのもやもやとした一切の暗黒を指先に込め、力の限り鍵盤を叩いた。

スケルツォを弾ききって弾む肩を、彼女の腕が優しく抱いてくれた。次に続くドラマに、熱い期待を抱いた瞬間。

「これ、先生が帰って来たら渡してね」と目の前に突き出した紙は、ピアノの発表会の宣伝の校正刷りだった。

Mはこんな時もビジネスを忘れない。啞然として顔を見ると、いたずらっぽく片目をつぶった彼女がにこやかに「じゃあ、またね」と言った。

背中を見せてドアへ向かう彼女に「あの噂は本当なんですか」と、意地悪く声を掛けた。

ドアのノブを片手で握った見返り美人は、ジッと僕の中を覗き込むようにして「どんな噂にしる、私のことについては全部本当の事よ。あなたも、もう理解できると思うのだけれど、真剣に生きる男と女の間には何だって有りなのよね」と、凄みのあるアルトで言ったのだ。

ドアを開け、半身を外に出したまま、しばらく間を置いてから彼女が言葉を続けた。

「確かピアニストは、もう学校へ行ってもしょうがなかったのよね。良かったら来週の水曜日に早引きして、蔵屋敷に来てみない」

開け放されたドアから寒い風が吹き込み、足元を冷たくなぶった。

Mがドアを閉め、帰っていった後も、すっかり入れ替わってしまった空気は冷たく汗ばんだ全身を包み込んだ。

水曜日に父の土蔵で何があるのだろうか。男女の間には何でも有りだと言い放った彼女の言葉が、全身が再び熱くなるような隠微な予感を運んで来る。

水曜日は終日、母が市の展示会で花を生ける日に当たっていた。

僕の身体は震えだし、全身に鳥肌が立ち、ペニスが急激に勃起していった。

## 5 高まる期待

水曜日は朝から冷たい雨が降っていた。

陰鬱な雨音が、カーテン越しにベッドの中にまで聞こえてくる。僕は頭まで被っていた毛布を右手ではぎ、横になったまま大きく伸びをした。逞しくそそり立ったペニスの先が毛布に擦れ、寝ぼけ眼がしっかりと開く。思い切ってベッドから跳ね起き、冷たいカーペットの上に立つと温かい裸身に冷気が襲い掛かった。

冬の朝は、この身を切られるような冷気がたまらない。とてもパジャマなんか着て寝る気にはなれなかった。しばらく裸の身体を冷気に晒してから白いパンツを穿き、窓のカーテンを勢いよく開けた。

薄暗い朝の光の中に裸になったケヤキが高く聳え、無数に上へ伸びた枝の間を大きな雨粒が走っている。全体的に濃いグレーに見えるバックの中で降る雨は、場合によって、はっきりと白く見えた。氷雨だった。

僕は、身震いしてから壁に掛けたカレンダーを見た。しばらく、今日の数字を囲っている赤丸を見つめてから、パンツを脱いだ。クロゼットの引き出しを開けて黒いビキニパンツを出し、足を通す。

「きっと何か起こる」と確信し、彼女のあかんべーをした顔のあった窓ガラスをじっと怖い顔で見つめた。

市街地の公会堂で花を活ける母の車に便乗したが、水温の上がない車内は凍るようだ。

今朝の車は母専用のMR IIだ。黒のミドシップ・ツーシーターのスポーツ車だが、ほとんど母は乗らなかった。いつもは父のベントを借用している母がMR IIを使うからには、父がベントを使う予定があるって事だろうか。

「チチは今日、どこかに出掛けるの」

何気なさを気を付けて装いながら、母に聞いた。

「いえ、何も聞いていないわよ。今日は仕事の日のはずだけど」と、あっけない答えが返ってきた。仕事の日も変な表現だが、週七日のうち四日を休診にしている父では仕方のない言い回しだった。

「変わった車に乗って行くんだね」

「たまにはハハの車にも乗らないとね。それに、この間あなたの連れて来た女性がスポーツカーを運転していたでしょう。でも、この車の方が性能がいいのよ」

まさか母がまだ、Mを意識していたとは思わなかった僕は、言葉に詰まってしまった。黙り込んだ僕を気にするでもなく、やっとヒーターの効いてきた車を母は、へたくそに操っていく。とにかく悪い日に悪い車に同乗してしまったもんだと、びしょびしょとフロントガラスを叩く重い雨を恨んだ。

やはり乾燥しきった寒風の中を、チャリのペダルをこぐのが一番だと思い、その次はやはりオープンにしたスポーツカーかなと勝手に決め、思わず浮かんだMの笑顔に、母の非難が気になって、運転席の横顔をうかがってしまった。

まるで待っていたように、母が声を掛ける。

「あなた、こんな天気でしょう。学校は何時に終わるの。時間が合えば迎えに行けるかも知れない」

まずいタイミングに慌てふためき「いや、いいんだ。ちょっと寒気がするので早引きするかも知れないから」と、本当のことを言ってしまってから、しまったと思ったがもう遅い。

「それじゃあ余計に大変じゃない。この天気だもの、ハハが迎えに行くまで学校で待っていた方がいいわ。多分五時頃には帰れるはずだから」

何てドジなんだろうと僕は思った。何と答えていいのか、しばらく言葉が見つからない。さんざん迷った末「今日は休むから下ろしてくれる」と言ってしまった。

「何を言ってるのよ。こんな雨の中で下りるなんて。熱でもあるんじゃない。お医者さんに寄ってから学校へ行きましょう」

とんでもないことになってしまった。何のポリシーもなく、淫らな予感だけにのぼせ上がって隠し事をすると、ろくな事はない。

僕は、掛かり付けの医院に寄って診察を受けてから、学校へ行くことになってしまった。

もう三年近く掛かったことのない老主治医は、相変わらずの藪医者だった。どこも悪くない僕を風邪と決め付け、僕ほどの年齢にしか見えない看護婦に命じて、お尻に注射まで打たせたのだ。

ベッドにうつ伏せになった僕のズボンを、一気に膝の辺りまで引き下げてから、看護婦

が一瞬、動きを止めたのが気に掛かった。その拍子に今朝穿き替えたばかりの黒いビキニパンツが目に見えた。ただのファッションだから知ったことはないと思っていても、不自然に手の動きを止めた看護婦の気持ちを押し量ると妙に気恥ずかしくなる。

「素敵なパンツね」とでも言ってくればいいのに、変にぎこちない指先で、お尻の割れ目が見えるほどにパンツを下ろしたのだ。ビキニの構造上仕方がないが、ほとんど剥き出しにされたお尻全体に冷たい空気を感じ、敏感なペニスが場所柄もわきまえず、むくむくと勃起してくるのだった。

僕は神経をほかのことに集中しようと、ひたすら二次式の一般開放の公式を頭に浮かべ、ペニスが落ち着くのを待った。しかし、看護婦は待つてはくれない。

飛び上がるほど痛い注射を打ち終わると、素早くパンツを上げてしまった。僕も素早く、股間を見られないように身体をねじって起き上がり、後ろを向いてズボンを上げた。ヒーターも効いていない診察室だが、もう汗びっしょりだ。

服装を整えて医師にお礼を言いに行くと、引退間近な小児科医は「顔がずいぶん赤いな。思ったより熱があるのかも知れないから、学校は休んだ方がいい」とのたもうた。

待合室にいた母に診察結果を話すと、タクシー代をくれた。生け花の会が始まるまでに時間がなく、僕を家まで送っていけないのだという。

息子の処遇に満足したらしい母は、医師と看護婦に挨拶すると、僕を置いて一人で公会堂に向かった。

健康そのものの僕と若すぎる看護婦、それに、もう引退をした方がいい小児科医が医院に残った。ほかに患者は誰一人いない。またこれからも、こんな天気の中を、わざわざ診察に出掛けて来る子供もいないように思われた。

「タクシーは三十分ほど待ってください、ですって。雨のために車が出払っているって言ってました」

待合室の椅子にぽつんと一人座っていた僕に、診察室から出て来た看護婦が言って、隣に座った。満員電車の中みたいに、すぐ近くに座られた僕は、面食らって腰をずらした。くすっと、看護婦が笑ったような気がしたが、無視して低い声で「仕事はいいんですか」と言ってみた。

「ご覧の通り患者さんはいないのよね。先生もお茶を飲み母屋の方へ行っちゃたわ。あなた、素敵なパンツを穿いているのね」

僕は正直言って、やっぱり女は不得手だ。



「看護婦は患者のパンツの批評もするのか」と切り返せばきっと「いけない事かしら。ペニスの批評だってするわ。良かったら見せてみて」なんて答えるんだ。そのうち右手が僕の股間に伸び、言葉でいたぶられて仕方なく勃起した僕のペニスをつかみ、可愛らしい口に含もうとするんだからやってられない。

「あなたの黒いビキニ、きっと私の彼に似合うと思うんだ。どこで買ったの、教えてくれない。もうすぐバレンタインデーじゃない」

やっぱり、付き合いきれないと僕は思った。この看護婦と後三十分過ぎさなければならぬと思うと情けなくなる。

「こんなパンツ、どこだって売ってますよ」

「冷たいのね。私の彼も素っ気なくて冷たいところがあるけれど、本当はとっても優しいのよ。きっとあなたも本心は優しいのよね。彼女はいるの」

「いませんよ」

「ほんとう。でも、彼女が出来るときっと優しくなるわ。きっとよ」

そんなもんだろうか、とは思ってみたのだが。僕は黙っていた。

「初対面のあなたにこんな話をする私を、変な子だと思う」

「思わない」と僕は言った。

初対面で、もっと変な話をした素敵な女性を知っていたからだ。そのお陰で僕は、病気でもないのに診療所で、看護婦と話す羽目になったとまでは言わない。

「そう、やっぱり君は優しいんじゃない」

いつの間にか、あなたが君になっていた。それに、見ず知らずの僕を優しいと言う。悪い気はしないが、特にときめきも感じなかった。Mと比べ、彼女は幼すぎるせいだろうか。

「僕は十八だけれど、失礼ながら、あなたは何歳ぐらいですか」

Mのようなスマートな聞き方は出来なかったが、思いきって年を聞いてみた。「ずいぶん礼儀正しい十八歳ね。私は二十七歳ぐらいよ」

ピーと口笛を吹くところだった。何と、彼女はMと同じ年なのだ。僕はすっかり安心した。やはりMは特別なんだ。僕のプリマはやっぱり、こうでなきゃ始まらない。

「何が始まらないの」と看護婦が聞く。

声に出さないことまで分かるのかと、目を丸くしたが、別にもう、どうって事はない。

「彼女がいなければ、始まらないって言ったんです」

答えた瞬間、外でクラクションが鳴った。やっどタクシーが来たと思ってコートに腕を

通し、靴を履いて、看護婦を振り返ると、

「お注射のとき、君のあそこ、大きくなっていましたよ」

真っ向から目が合ってしまう、満面に笑みを浮かべた看護婦が問い掛ける。

「ありがとう。あなたが、とても素敵だったから」

大きな声で彼女に応え、ドアを開けて冷たい雨の中に出た。身体がきゅっと引き締まり、また少し大人になったような気がした。

「どちらへ」と尋ねるタクシードライバーに、

「山地へ」と答えた。

「山地はもう雪になっているかも知れませんね」との答えに黙ってうなずき、フロントガラス越しに降る氷雨を見つめた。僕はもう、何だって受け入れることができる。

対向車もない街路をしばらく走り、見慣れた山に挟まれた溪谷浴いの道路まで行くと、運転手の予報通り、雨は雪に変わった。

うっすらと雪の積もった道で、家へと曲がる指示がちょっと遅れた。

急ハンドルを切ったタクシーのテールがすっと横に流れる。谷へと向かう車体を立て直そうと逆ハンドルを入れた車は、大きく左右に揺れ、そのまま反対車線まで一直線に滑り、山側の縁石に凄い衝撃で乗り上げてしまった。

エンジンが止まった静かな車内に、タクシードライバーの緊張しきった震え声が響いた。

「すみませんね。けがはなかったですか」

「いや、大丈夫です。車は動きますか」

僕の答えで、落ち着きを取り戻したタクシードライバーは、何回かセルモーターを泣かせてから、やっとエンジンを復活させた。しかし前輪を縁石の向こう側まで出してしまった車は、どのようにハンドルを切っても走り出せはしない。

しばらく虚しい努力を重ね、額の辺りに汗がにじみ出てきた運転手に声を掛けた。

「僕が降りて前から押しますよ」

「そんなのダメですよ。病院から乗せたお客さんにそんなことさせては、私がかびになっちゃいますよ。今、無線で代わりの車を呼びますから、ちょっと待っていてください」

「いや、僕は病気ではないし、家はすぐ近くですから心配ありません」

言い終わらないうちにドアを開け、車外に降り立つ。温まっていた身体全体を寒気が包み、やけにべと付く雪が頬に降り掛かって来た。

僕は車の前に回り、窓から顔を突き出しているタクシードライバーとタイミングを取り合いながら、カー杯タクシーを押した。五回目でやっと前輪が縁石の淵を噛み、大きくバウンドして凄い速さでバックしたタクシーは、久しぶりの路上で、ボンネットからうれしそうに大量の白い息を出した。

「ありがとうございます。早く乗ってください。風邪を引きますよ」

本当にうれしそうなタクシードライバーの言い方がなぜかおかしく、思わず、にこやかに笑ってしまった。そう、僕はお客さんなんだ。

客からボランティアに変身し、十分喜ばれたことに満足しきった僕は、晴れやかに大きな声で答えた。

「いいんです。びしょ濡れになってしまったから、歩いて帰ります。おいくらですか」

「そんなのダメですよ。料金なんか受け取れませんよ。無料ですから乗ってください。ぜひ、送らせてくださいよ」

「本当にいいんです。ただでここまで来れたと思えば、なんてことないですよ。気にしないでください」と言って歩き出した僕の隣に、タクシーが並ぶ。

運転席の窓から、雪でびしょびしょになった顔を突き出したタクシードライバーが恨めしそうに声を出す。

「ねー、乗ってってよ。意地悪しないで。このままでは、私の気が済まないですよ」

僕がいい気分なのだから、それでいい。今更、シートをびしょびしょにすることはなかった。

僕は谷側へと進み、車の通れない農道へ降りてしまった。

「ありがとう」と振り返って言うと、タクシーから降りたドライバーが深々と頭を下げた。僕の背中に大きな声の「ありがとう」

天気と同じように本当に変な日だと、僕は思った。しかし気分はいい。看護婦もタクシードライバーも、今朝出会った人は皆、僕の気分を浮き立たせてくれた。これで、メインイベントのMとの出会いがご機嫌なら、最高の気分になれると僕は踏んだ。

びしょ濡れしてしまった服も、気にならなかった。

しかし寒い。農道の上には白く、うっすらと雪が積もっている。僕の周りを濃密に、包み込むようにして降る雪もいつしか、軽く、舞うように、深々と降る。

少し前のびしょびしょと重い、身体を濡らすシャーベット状の雪ではなかった。身体に積もっても身震いすれば払い落とせそうな、固く締まった冷たい粉雪になっていた。

きっと、車を押していたときが最悪の状態だったのだ。やはり僕は、それほど付きまわっていたわけではないようだった。寒い。

今歩く農道は、一段高くなっている僕の家を回り込むようにして裏口へと続いていた。ちょうど母屋と蔵屋敷の、真ん中あたりに上って行く道だ。

雪に霞んで視界の効かない目に、ぼんやりと庭のケヤキが見えてきた。寒い。僕は早足になり、足元を何回となく雪に取られた。

農道から庭に上がって行くと視界が開け、白く雪化粧した風景の中に特異な原色が見えた。

Mの真っ赤なロードスターが、ケヤキの下にちんまりと止まっている。さすがに今日はオープンでなく、幌でもない。ご丁寧に真っ赤なハードトップに付け替えてあった。その姿はどことなくグラマラスで、雪の中の彼女に十分似合いそうな感じだった。

僕は、ふっと白い息を吐き、大きく深呼吸した。

あれほど凍えていた身体に、熱が回って行くのが分かる。まだペニスにまでは熱が行き渡らないが、もう秒単位の時間の問題だった。

雪原の散歩の果てで、Mの真っ赤な車を見たうれしさに「わー」と大声を出し、転びそうになりながら車へと走った。うっすらと白くなったロードスターの広いボンネットの上に大きく「M」と、指で描いた。白い雪の下から現れた真っ赤な文字は、まるで僕の気持ちのように、浮き浮きと鮮やかに踊っていた。

ところでMは、今どこにいるのだろうか。

雪の上に字を描いた凍える指先を舐めながら、しばし凍った頭で考えた。

この家には今まで、父と患者しかいなかったはずだから、やっぱり診療所にいるのだろうと、思い当たり。途端に拍子抜けしてしまった。

何だ彼女は、また歯の治療に来ただけなのかと思ってから、すぐその考えを打ち消す。何と言っても今日は、Mの招待で自分の家を尋ねて来たのだから、たかが歯の治療の立会人を頼まれたとは思いたくもなかった。

とにかく診療所を覗いてみることに決めたが、びしょびしょになった服を着替えようとは思ってもみなかった。それほど思いは熱かったし、今朝の武勇伝を早く、彼女に聞かせたくもあったのだ。

はやる心のままに、誰も見ていないことを幸い。まるで幼児のように小走りに、何回か転びながら雪の中を急ぎ、診療所の前に立つ。もう全身雪まみれだ。

息を切らせて着いた診療所の入り口には、父の漉いた紙に見慣れぬ文字で「本日臨時休診」と書いて張ってあった。

もちろんMの仕業に違いない。

そう思った途端、父と彼女が一緒にいる姿が「もちろんしたわよ」という言葉となって、目と耳に成り代わったペニスで響いた。僕は慌ててUターンして蔵屋敷へと走る。もう、寒さも雪も知った事じゃない。三回ほど転び、雪と泥にまみれきって自動ドアの前に立った。

しかし、ドアが開かない。センサーに認めてもらいたくて、創作バレーみたいにいろいろとポーズを取ってみたが、開かない。多分電源が切られているのだと思い、かじかんだ手でドアを押し開こうとしたが虚しく、中からロックされている事が分かった。

ただやみくもに、なりふり構わず固く閉ざされたドアを、凍えて感覚のなくなった両手で打ち叩く。口からは真っ白な息とともに、父を呼び続ける言葉があふれ出した。不思議に彼女の名前は口を突かない。

声が枯れきるかと思うほどに呼び掛けるが、降り積もる雪が音を吸い込み、中からの反応はない。

喉が痛くなってしまい、ドアを叩く手の動きだけを止めず、コンクリートの床に座り込んでしまったとき。すっとドアが開き、薄い絹のケープをまとったMが、目の前に立った。

## 6 官能の宴

「ピアニストの学校はずいぶんユニークなのね。こんな天気にも、どろんこ遊びをするんだ」

のんびりしたアルトを聞いて、僕は不甲斐なく涙ぐんでしまった。雪と泥にまみれた汚れた服が、急に気に掛かった。

「さあ、早く中に入りなさい。いつまでも座り込んでいると風邪を引くわ」

「医者に掛かってきたから大丈夫です」と言って立ち上がると、目の前に訝しげな首をかしげた笑顔があった。部屋の奥から彼女越しに流れて来る温風に、ゲランの香りが甘く混ざる。

僕は、ほのかな香りに誘われるように冷え切った身体でふらつき、二歩前に進んだ。両手を一杯に広げ、全身を彼女に投げ出すようにして倒れ掛かった。

意地悪く身を交わした彼女は、僕の右手を取って後ろに回り込み、後ろ向きの僕をきつく抱きしめる。耳の近くで息づかいが聞こえ、はるか遠くで自動ドアの閉まる機械音がした。

Mの両手が前に回り、びしょ濡れた服の上から身体をまさぐる。冷え切っていた身体が、芯から熱くなり、瞬く間に熱が指先まで届く。僕は彼女に背中を預けたまま両手を後ろに回した。

薄い絹地越しに、温かな肌の感触が伝わって来る。そのまま両手を上げ、腰からヒップの膨らみへと向かったとき、伸ばしきった両手のひらに尻の割れ目が生々しく触れた。僕の心臓はどきんと高鳴ったまま一瞬停止してしまったようだ。彼女は、黒い絹地の下に何も身に着けていなかったのだ。

僕は失礼にも、開いたままのひらで張り切ったお尻の肉をつかみ、割れ目に沿って両手できつく握り締めた。

耳の側に寄せられた、柔らかな唇から「うっ」と呻き声が、大きな音で僕の下半身に響いた。ペニスはもう、濡れたズボンを突き破りそうな勢いで、勃起していた。

「優しく、優しくしなければだめよ」

耳元で熱い息づかいとともに、猫が喉を鳴らすようなアルトが囁く。急いでお尻から手を離すと、彼女の手がベルトを外し、ファスナーを下げる。

「あっ」と、声を出してはみたが、ズボンをずり下げる彼女の手を協力して腰を振った。濡れたズボンが足首まで落ちる。パンツの上から存分に、彼女がペニスをまさぐる。

「素敵なビキニね。色はなに」

「黒です」と答えたときには情けなく、肛門から脳へと快感がマッハで走りきり、せっかくの黒いビキニの中で射精してしまった。

「そう黒いビキニか。きっと私のために穿いてきてくれたんだ。でも汚しちゃったね。全部びしょびしょなんだから、ここで脱いじゃおうよ」

射精した後も勃起したままのペニスを、精液に濡れたパンツの上から撫でながら、恐ろしいことを言う。

僕は、急に父のことが気に掛かり、身を固くした。

「あれ、どうかしたの。あんなに元気だったオチンチンが萎んでいくよ」

彼女の言葉に恥ずかしさがこみ上げ、頬に熱を感じた僕は、手を振り払うように身を翻して、Mと面と向かった。

しかし、僕は何事も格好よく行かない。足首まで降りたズボンが邪魔して手足がもつれ、彼女に支えてもらったお陰で転ばずに回転できたのだ。本当に情けなくなってしまう。

追い打ちは、待ってはくれなかった。

「ピアニストはまだ、こういう事を恥ずかしいと思って嫌うわけだ」

父の目が気になるとは言えない僕は、黙って下を向いていた。まるで学校で先生に叱られているような気がしてくるが、僕はこれまで教師に叱られたことはない。座敷へと続く、この三畳ほどのアプローチも十分ヒーターが効いていたが、剥き出しになった両足で微かに、冷たく風が立った。反射的に顔を上げると、正面にケープを脱ぎ捨てた彼女の裸体があった。

またすぐ下を向き、目に焼き付いたシーンを反芻した。始めて見る彼女の裸身だった。いや、女性の裸を、写真や映画以外で見るのが、つまり、生のヌードは初めてだった。

本当に、いや、今度こそ本当に僕は困った。いつまでも下を向いているわけにいかないし、彼女が黙って立ち去ってくれるはずもない。大げさなようだけど、僕の責任と人格で進退を決めなければならないのだ。

それにしても、下を向いたまま目をつぶると、彼女の裸身の美しさばかりが浮かんで来る。

“均整のとれた曲線が、立体として表出している”多分、美術のテストの回答ならこれで

満点のはずだ。これまで気付かなかったが、ヌードの彼女はビデオで見た「パリス・テキサス」のナスターシャ・キンスキーみたいだった。でも、あの映画にヌードはない。それほど彼女が素敵ってことなのかと思い、目を上げればまた最高の裸身を見られると思った途端、Mの鋭い声が飛んだ。

「私の身体を見るのも恥ずかしいの。あなたに見てもらえない、私の恥ずかしさも知ったがいいわ。ピアニストはもう立派な大人の男なのだから。女に子供を産ます能力に見合った人格と責任を持ったがいいわ。説教する訳じゃあないけど、女はね。子供が産めるようになったときから、最高の男を見分けようと努力しているのよ。さあ、顔を上げて、目を開いて、私を見なさい。あなたは私がいいと思った男だって事に、誇りを持っていいのよ」

「はい」と大きな声で答え、さっと顔を上げ、目を開いた。

彼女の顔は楽しそうに微笑んでいて、その裸身はやはり最高に美しかった。ただ、デルタで燃えるように天を突く黒々とした陰毛だけが、違和感をともなって僕を脅迫した。

素っ裸の彼女が肌が触れるほどに近付き、濡れネズミの僕を裸にする。僕は彼女の裸身を目で追いながら、なすがままになる。きびきびと動く裸身は装っていたときと比べられないほどに美しい。

Mと同様、彼女の手で素っ裸にされた僕の身体を、彼女が見る。僕は全身を真っ赤にさせ、十分すぎるほどに勃起したペニスを意識し、彼女の陰毛に感じた違和感を自分の陰毛に感じた。恐らく僕は大人になりきっていないと、そのとき感じ、幼いときに彼女と、これまでしたことはない、お医者さんごっこをしたかったなどと思い、よけい肌を赤く染めペニスを硬くさせていたのだ。

「ピアニストはいつも元気ね」

呟くように言った彼女は僕を抱いた。初めて感じる素肌と素肌の触れ合いのすばらしさは、僕にまったく新しい地平を見せてくれた。冗談ではなく僕は、このまま世界が終わりになってもいいときえ思ったのだ。

「君は立派な男よ。なによりも決断力がある。大事にしなさいね。いずれ私の敵になるんだから」

激しく首を横に振った口に唇が重ねられ、ゲランのルージュに僕は赤く染まる。口から首、首から胸、特に乳首を這う彼女の舌はすばらしく、また僕は射精しそうになる。お臍に入って来た舌にくすぐったくなり、ようやく恍惚感を逃がしたとき、ペニスが口に含ま



れた。たまったもんじゃないと思い腰を折って跪くと、やっと口を離して、のし掛かって来る。僕は男だと自分に言い聞かせ、体を入れ替えてのし掛かると、ペニスの先が彼女の陰毛に触れ、また射精しそうになる。慌てて腰を浮かすと、Mの指が優しくペニスに添えられ、僕を誘導する。

なにもかも一切分からなくなったとき、ペニス全体が温かく柔らかなヒーターの効いた宝石箱の中に迎え入れられた。その滑らかな温かさを感じた瞬間、僕はまた射精した。

僕は彼女を抱き、いや、彼女に抱かれ至福の時を過ごした。時間など、止まってしまえと思ったが、時とともにペニスは急速に萎んで行く。おもしろいことに、あれほど意気軒昂だった士気も萎む。

「妙にしょぼんとしてるわね。初めてだったんでしょ」

「もちろんですよ」

「別に威張ることではないと思うけど、でも、君は素敵だったよ」

彼女の、賛辞と思える言葉を聞いても、僕は別にうれしくはなかった。

きっと、あっけない幕切れが、新しい舞台への期待に変わるまでには時があるのだ。

例えば、今日の天気は雪だが、いずれは晴れる。そう思うことにしたのだ。

「さ、歯医者さんの所へ行きましょう」と彼女が言った。

その一言で、忘れていた父のことが急に思い出された。

「こっちよ」と彼女は、まるで自分の家のように座敷へと誘う。そこは父の趣味の王室だった。

二十畳の座敷に水道とガスを引き、バス・トイレを据え付け、思うままに紙漉き三昧の毎日だった。しかし、長続きしているわけではない。

紙漉きの前は木工、木工の前は焼き物、焼き物の前は書道、書道の前はおきまりのゴルフだったのだ。とにかく、これといったポリシーのないままに、本業以外の世界に憧れているようだった。患者の口の中ばかりを見つめる、短調な仕事のはけ口を見出したいがための趣味三昧のようだった。

十八年間付き合ってきた僕にも、その趣味の遍歴のいわれはよく分からない。まだ、生け花一筋の母の生き方の方が、いくらか分かりやすかったと思っている。

自分の家にも関わらず、案内されるままに素っ裸で座敷に通る扉を開けた。父に会うことが分かっているのに素っ裸のままなのだから、ほとんど僕も狂っていた。

「さあ、ご覧なさい。これが歯医者さんの究極の趣味よ。もう絶対、紙漉きなんてする気もないみたいよ。ねえ先生。あなたの素敵なピアニストを連れて来ましたよ」と言う、Mの自信に満ちた言葉は、右の耳から左の耳へと消えてしまっていた。

素っ裸の僕は、奇妙な衣装を着けた、素っ裸の父と対面していたのだ。

父は縛られていた。素っ裸で縛られていた。がっしりした裸身に、黒々とした麻縄が縦横に走り、父はあぐらをかいたまま、惨めなペニスと肛門を宙に掲げて緊縛されていたのだ。

「ピアニストのパンツも素敵だったけど、歯医者さんの縄の衣装はもう、完璧でしょう。築三百年の家の主人が大好きだった衣装なのよ。それに、全部私の身体で試したことがあるから、自信を持って最高だって言えるのよ」

「やめてください」と僕は叫んだ。

なにが何でも悲惨すぎたし、たとえ百歩譲って父が望んだことだとしても、息子の僕にとっては許せる姿ではなかった。

「チチはなにをしてるんですか」と大声で呼び掛ける。

父は、萎みきったペニスと肛門を頭上に上げた情けない姿のまま、面倒くさそうに薄目を開けて僕を見上げた。

「やあ」と、苦しそうな姿勢のまま、目の合った僕に言ったのだ。

「やあ」と、仕方なく僕も答え、どう見ても父より大きく立派なペニスを恥じるように、力無く横を向いた。

「ピアニストが恥じることはないし、歯医者さんのことを軽蔑することもないと思うわ」と彼女が言う。

「ピアニストも歯医者さんも私も、みんな素っ裸でいるのだし、皆それぞれ思うところもあるの。私の希望を先に言えば、お願いだから歯医者さんの隣に、彼とびったり身体が張り付くように縛り上げて欲しいと思うわけ。もちろん君に縛ってもらいたい。歯医者さんと同じように後ろ手を高く縛り上げられ、あぐらを組まされてあおむけにされたいの。そして、肌と肌とを密着させたまま君の前で、性器と肛門を宙に掲げた、恥ずかしい晒し者にされてみたいわけ。君が拒絶するのは自由だし、希望があればそれを優先するわ。しかし、チチはもう、一步先に踏み出していることだけは分かって欲しいのよ」

分かって欲しいと言う彼女に、無理があると僕は思った。父がどこへ向かって一步を踏み出したのかも分からなかったし、僕が彼女を縛り上げなければならない理由もなかった。

しかし、三人とも素っ裸でいるのだ。おかしい格好をした父を前にした異常な状況の中では、僕は一人きりの少数派だった。

珍しく早い決断で僕は言った。

「いえ、あなたの言う通りにはできません。どうしてもゲームに参加しなければならないのなら、僕をチチのようにしてください」

「そう、確かにゲームみたいなものなのだから、そんなに深刻になってはつまらないわよ。私は不満だけど、ピアニストの希望を入れるわ。さあ、跪いて手を後ろに回しなさい」

怖い声で言い切った彼女が、ぼかんとしている僕の頬を平手で張った。

ピシッという音が耳元に響き、熱い痛みが右頬に広がる。生まれて初めて頬を打たれたショックに全身を震わせ、ぎこちなく腰を折って彼女の足元に、うなだれて跪いた。

途端に胸を蹴り付けられ、背中から床に倒れた。

「お願いしたのはあんたでしょう。もっと真剣になりなさい。命がけの仕事なんだからね」

何が仕事なのか意味が分からないまま反射的に起き上がり、恐怖と緊張感に身を硬くしたまま、きつちりと正座して後ろ手に高く腕を交差した。

「よしっ」とMが短く言い。両手首に、ザラザラとした麻縄の感触が厳しく襲い掛かって来た。後ろ手に縛られたまま、首筋近く持ち上げられた両手首の縄尻が首に回され、結び目が作られる。胸の前で左右に分かれた縄が両の二の腕を二巻きし、胸の前で交差された。乳首を挟み込むようにして縄の菱形ができる。ウエストをきつく二巻きし、臍の下で結び目を作った後、二本の縄が股間に延びてペニスと睾丸の根元に巻き付けられた後、残った縄の中間に不思議な結び目が作られた。

「この結び目はね、私のときは違うところへも入れられたのよ。でも、ピアニストの場合は選択の余地はないわね。さあ立って、脚を広げ、お尻を後ろに突き出しなさい」

命令に従って立ち上がり、足を開くと、尻が指で左右に広げられ、麻縄で作った結び目が肛門の中に挿入された。確かに十分すぎるほどの驚きとショックが襲いはしたが、鋭く肛門をなぶる痛みの中で、僕はただ彼女の言葉だけを考えていた。

今、僕の肉体を襲ったと同じ驚愕と痛みが、かつて彼女の肉体を襲ったのだ。ざらつく麻縄の結び目は、性器に分け入り、肛門に突き立ち、きっと彼女を責め苛んだことがあるのだ。

僕はMの体験と同じ責め苦を甘受することによって、恥辱を希望に替えようとヒロイッ

クに決心した。それが性経験の浅い僕の、父と張り合える唯一の立場だと直感的に理解したのだ。

「ピアニストは硬いわね。オチンチンの事じゃないのよ。そんなに硬く真剣に構えられると疲れるのよね。セックスは、もっと楽しく愉快的なものなのよ。また説教しちゃったかな。でも、君はとても潔くって好きよ」

根元を縛られたペニスを、屈み込んだ彼女が口に含む。腰に回した手で尻の割れ目に食い込んだ縄を揺する。肛門に挿入された縄の結び目が粘膜に擦れる隠微な感触と、舌に弄ばれるペニスの快感がたまらなくなり、きつく根元を縛られているにも関わらず僕は、長く続く快感が絞り出す精液を、彼女の口腔に溢れさせた。

「すばらしく元気なのね。でも、もったいない使い方をした罪を、後で十分罰して上げるわね。正座しなさい」

僕は突き立ったままのペニスを、きつく両腿の間に挟み込んで正座した。下を向いた目に、腿の付け根から突き出したペニスの先が、一つ目小僧の顔をして僕をあざ笑っている。「若いって事は本当にすばらしい事よ。私だって負けるくらいのパワーなんだから。少しは歯医者さんにも分けて上げた方がいいわ」

肩に両手を掛けた彼女はそのまま力を入れ、床を引きずって僕を父の前まで運んで行く。目の前にあぐら縛りにされた父の肛門が見える。どす黒くなった括約筋が醜く震え、すぐ上に萎びきった小さなペニスがちょこんとくっついている。さすがに恥ずかしくなって目を伏せると、逆さまになった父の顔が眼下にあった。

「血を分けた二人なのだから、仲が良いところを見せてもらって家庭の暖かさに触れさせてもらおうわね」

言い終わらない内にMは、後ろ手に緊縛されたまま正座した僕の首筋と腰に手を当て、あおむけになっている父の裸身の上に押し倒した。前に倒れ込む恐怖を味わう間もない内に、後頭部を両手で強く突かれ、あぐらを組んで開け放された父の股間に、すっぽりと顔を押し込められてしまった。突き出された顔が、萎んでふにゃふにゃになった父のペニスに触れ、慌てふためいて身じろぎする尻を、彼女は情け容赦もなく押し出し、父の裸身に密着させる。頭を父の股間に突っ込み、尻を無様に突き出したまま踏ん張っている両足を、Mが抱え込んだ。無理矢理僕の足を折り曲げた彼女は、父の頭を囲むようにして、両足をあぐらに組ませた。今度は父の顔が、突き立ったペニスに触れる。

何といい加減で隠微な、恥知らずのポーズを親子で演じているのだろう。僕はもう、す

べての思考も感覚も停止寸前まで来てしまった。あれほど猛り立っていたペニスが急速に萎えていく感覚だけが、辛うじて僕を現実に繋ぎ止めている。

「先生。怠けていてはだめじゃない。ピアニストのいる場所がなくなってしまうわ」とMが父を叱咤する。

その瞬間、心臓が破裂するほどに驚いたことには、彼女の声に反応した父の口が、萎え掛かった僕のペニスをくわえたのだった。もう、喉元まで吐き気がこみ上げ、全身に鳥肌が立ったことを、僕は恐らく死ぬまで忘れはしない。

そんな僕の態度を鋭敏に感じ取った彼女は「子供のくせに生意気よ」と一喝した。

鋭く響くアルトとともに、尻に裂かれるような激痛が見舞った。ピシッという皮膚の鳴る音は、数回、鋭い痛みとともに遅れて混乱しきった僕の耳に達した。

剥き出しの尻と肛門を鞭打たれる痛みを叫び、身悶えする顔を、父の勃起しかかったペニスが不快に撫でる。

「やめて。やめてください。お願いだからやめてください」

僕は泣きながら、震えながら哀願していた。

「恥ずかしい男ね」

彼女の吐き捨てた言葉と、ひときわ高く音を立てて尻で鳴った鞭音が、痛みの感覚もなのまま僕の耳に残った。

ビーと口を鳴らした後、Mは僕の側に屈み込んだ。

黙々と、僕を父の裸身に縛り付けた縄を解きながら、ひときわ覚めたアルトで言い聞かせるように話し掛ける。

「だから私の希望通りにした方が良かったでしょう。何てったって君は初心者なんだからね。背伸びはしない方がいいのよ」

子供扱いされたようで全身が熱くなったが、鞭打たれて熱く痛む尻の感触が僕を、そのまま異数の世界に閉じこめてしまった。

泣き咽ぶ僕を父から離れた後。緊縛されたままやっと、人心地ついて放心している僕の前に、彼女がすっくと立った。

「口ほどにもないことしかできなかった罰を受けてもらうわよ」

声とともに、精液で濡れてしまった黒いビキニパンツが頭から被せられた。生臭い精液の臭いと、べと付く不快感に咽せかえると「情けない行動の罰を、勝手な性にまみれたパンツで償うのよ」と言って、目が見えるようにパンツの形を整える。

彼女のために身に着けた、真っ黒のビキニを頭から被せられたまま、後ろ手に緊縛された戒めを冷たい仕草で解かれた僕は、痺れきった両手を久しぶりに前に回して指を屈伸させた。

痺れた両手に回りきらない、血液の遅さに苛立っている僕に「いいわね」と声を掛け、Mが背中を見せた。

しなやかな両腕を背中に回し、僕が上げられないほどの高さまで両手を揃えて上に上げる。

「縛ればいいんですよね」

顔に被せられた黒いビキニ越しに、自分の精液に咽せかえりながら、僕は彼女の手首に黒い麻縄を這わす。

彼女が僕の肉体を緊縛した様子を思い出し、なぞるように、丁寧に縛り上げる。乳房を囲む菱形の縄目や、二の腕に巻き付ける縄の動きには、厳しくチェックが入る。これも彼女を飾るドレスだから仕方がないかと、少し冷静に考えられるようになった僕は、頭に被ったビキニの向こうでほくそ笑み、股間に伸ばす二条の縄に工夫を凝らした。

二本の縄に間隔を取って、大小二つの硬い結ぶ目を作ったのだ。もちろん大きな結び目は性器の中に、小さな結び目は肛門の中に押し込むつもりだ。

ウエストを二巻きし、背中から股間に下ろした結び目を性器と肛門に当て、指で柔らかな粘膜を押し開いて、順番に挿入した。彼女の口から、ウーとうめき声が漏れ、恨むような陶然とした視線が見上げた僕の目を打つ。

Mの反応に自信を持った僕が、股間に食い込み、性器と肛門に分け入っている縄尻を力一杯引き絞ると、彼女はムーと大きな甘えるような声を上げ、豊満な尻を左右に揺すったのだ。

今度は、黒い麻縄の結び目をくわえ込んだ性器と肛門に指先を這わせ、片方の手で縄尻を引き絞った。指先に粘膜の蠕動する感覚が伝わり「ヒー」というセクシーな叫びが口を突いた。

もう、紛れもなく僕が支配者だと思った。萎えきっていたペニスも熱く勃起し、指先に伝わる敏感すぎるほどの彼女の性感と、縄尻から伝わるダイナミックな身体の動きが、僕の人格のすべてを支配し尽くしていた。

これで満足し、自分の快楽を追う事ができれば、きっと大人物になれるはずだと僕は思った。しかし僕は、余計な好奇心に誘導されてしまったのだ。

先ほどMが僕にしたように、彼女を引きずっていった僕は、父の股間に彼女の頭を押し込んだ後、彼女の長い足に父の頭を抱かせ、あぐら縛りにくくりつけてしまったのだった。

素っ裸で後ろ手に緊縛され、あぐら縛りにされた父とMが上下に逆さまになって重なり、お互いの陰部に顔を向けている。そんな二人のウエストを、新しい縄できつくびったりと縛り付けてやった。

縛り終わらない内に、二人の卑猥な行動は始まっていた。自由の利かない後ろ手あぐら縛りで重なり合った二人は、辛うじて動く首を亀のように振り合い、互いの陰部を震えながら舐め始めたのだった。

二人に猿轡を噛ませなかったことを深く後悔したが、予想すらできなかった赤裸々な性の展開の前にはもう、後の祭りだった。

呆然と立ちつくす足元から歓喜の二重唱が、海鳴りのように高く低く聞こえて来る。「ねえピアニスト。君の立派なペニスで透き間を埋めてくれない。ねえ、お願いだから縄を外して」

あっけにとられたまま見下ろす痴態の中で、喘ぐようなアルトがせがむ。ポーとした視線のピントを、無理に彼女の口元に合わせる。

やっと逞しく勃起した父のペニスを喉の奥までくわえ込み、よだれまみれになって震えている、ゲランのルージュが剥げ掛かった唇が視野一杯に広がる。

こみ上げる吐き気をこらえるように目を足元に落とすと、先ほど僕の尻を打った黒い皮鞭が目に入った。思わず腰を屈めて皮鞭を拾い、目の下に広がる彼女の優美な曲線を目掛け、力一杯鞭を振るった。透き通るように繊細な尻の上に真っ赤な筋が走り、ピシッという心地よい高音が残響を伴って、蔵屋敷中に鳴り響いた。その素敵な音に憑かれたように、僕は何回も鞭を振り下ろした。

官能の高まりにほんのりとピンクに染まった尻に、縦横に赤いミミズ腫れが走った。しかし、Mはペニスをくわえ込んだまま声も上げない。父の張りきったペニスに歯が食い込み、赤く血が流れていた。

「はやく、ハヤク、はやく、ハヤク」と喘ぐように漏れる、鞭の痛みに耐えたうめき声が、僕を地獄へと誘う。

僕は、高く掲げた皮鞭の向きを変え、尻の割れ目に沿ってひときわ強く振り下ろした。

ピシッと耳に響く鞭音を聞く間ももどかしく鞭を投げ捨て、Mを縦に割った縄を解いた。またたくまに彼女は、自分の力で股間に挿入された縄の結び目を排出する。僕は、最大限

に張り切ったペニスを振り立て、目の前で揺れる赤い鞭痕にまみれた尻に向かって、力いっぱい突き出していた。

乱暴に性器に挿入したペニスは、じつりと濡れそぼった震える粘膜に、ゆったりと迎えられた。これ以上大きくはなれないほどに膨張したペニス全体を、むらなく柔らかく、かつ柔軟に彼女の性が包み込んでくれる。

泣きたいほどの快感が背筋を突き抜けそうになったとき、ペニスの下で陰部をなめ回している父の口から「ほっ」という声が漏れた。ひょっとすると性器に包まれたペニスの根元を、父に舐められたかもしれないと思った。

高まりきろうとした快感が、急に逃げ去ろうとした瞬間、背後で獣の遠吠えが聞こえた。

突然、部屋中に満ちた吼え声と足音とともに、剥き出しの尻に、飛び掛かって来る爪の感触があった。射精寸前で起こった事態が飲み込めず、慌てて左右を見る。

目の前のほっそりしたMのウエストの横から、父の顔と彼女の陰部の間に割って入って来た、シェパードのケンの顔が見えた。

「ヒー」という高い声が、父のペニスをくわえているはずの口からほとぼしり、高く掲げられていた彼女の尻が急に落ちた。

途端にペニス全体が強い力で締め付けられ、コンクリートで固められたように、彼女の体内に釘付けされてしまった。

怖いもの知らずの彼女は、まるでドラエモンのように犬に弱いらしい。ケンに股間に潜り込まれたショックで痙攣を続ける彼女の性器は、万力のようにペニスをくわえ込んで放さないのだ。

「あなた方は、とんだ茶番を見せてくれるのね」

背後から冷たく母の声が聞こえた。ぎょっとして体を起こそうとするが、Mが体内にくわえ込んでいるペニスを抜くことが出来ず、目を白黒させるばかりだ。「奥様、犬を繋いでください」

どんなときでもMは大したものだ。幾分震えるアルトで、素っ裸の三人を代表して真っ先に口を開いた。しかし、ペニスをくわえ込んだ性器の緊張は衰えることもなく、小刻みに硬く痙攣を繰り返すばかりだった。

「仕方がない、こんな際だ。診療所から麻酔薬を持って来なさい」

一番下であお向けになったまま、状況を察した父が冷静な声で言った。たとえ素っ裸で後ろ手あぐら縛りにされ、陰部をなめ回していたとはいっても、父は歯科医だ。いざとい



うときの落ち着き振りは、やっぱり見上げたもんだと僕は思った。

「まったく、どうしようもない人たちなんだから」と言う母の声が背後に遠ざかり、入って来たときには聞こえなかった自動ドアの音が微かに聞こえた。

「覚悟しててくださいいね。妻は私には甘いけれど、周りには結構きついですよ」

まるで世間話のように、彼女の股間から父が話し掛ける。

「仕方ありませんわ。どうも、私は犬アレルギーがひどくって困ってしまふんです」

ペニスをくわえ込んだ尻の割れ目から続く、滑らかな背筋の先で小首をかしげて話す彼女の声が、やけに遠く寂しげに聞こえた。

やがて戻って来た母が、重なり合った三人を憎々しげに見下ろす。

母は、父の股間に頭を入れたMの前に屈み込んだ。ガーゼに浸した麻酔薬を口と鼻に乱暴に押し着ける。まるで父の股間を拭いているようにも見える。異様で陰惨な光景だった。

しばらくの時間が過ぎると、ペニスをきつくくわえ込んで、細かく痙攣を続けていた彼女の粘膜が急速に静まっていくのが、解放されて行くペニスの先に伝わって来た。思い切った腰を引くと、張り切っていた両の股の筋肉が、あっけないほど延びきってしまい、しりもちを着いてしまった。血液が止まって熱く燃え立ったペニスに、外気の冷たさがやけに心地よかった。

「いつまでそんなものを被っているのですか」と言う母の叱責に我に返り、被っていた黒のビキニを脱ぎ捨て、母の顔を振り仰いだ。

想像していたよりずっと、母はおだやかな表情に見えた。父に言わせればきっと、こういうときが一番怖いと言うに違いないと思ったが、知らぬ振りをして顔を伏せ、上目遣いにぐったりとしたMの裸身をうかがった。

彼女は全身からほとぼしっていた怪しいエネルギーを失い、父の裸身に身を投げるようにして、力無く覆い被さっていた。床に尻を着いた僕の位置からでは、大きくあぐら縛りに開かれた尻の割れ目の肛門も性器も、見ることは出来なかった。しかし、性器の所在さえ自己主張できないほど弛緩してしまっているように見えた。そんな彼女を全身で支えた父は、母の存在もまるで無視したように、ひたすらMのベッド役に徹しきっている。

「早くチチをその女からどけてしまいなさい」

冷たく命令する相手は僕しかいない。

母の命令にビクッと身をすくませた僕は、恨めしそうにシェパードのケンを見た。ケンは母の隣に誇らしく立ち、長い尾を激しく打ち振っている。

## 7 後始末

温かく暖房の効いた蔵屋敷に四人が揃った。

三人は僕の家族で、それぞれが相応しい服装に身を整えていた。父は強烈な縄の衣装を手染めのオーヴァーオールに替え、僕はジーンズにアランのセーター姿。パンツはいつもの白のセミビキニに替えていた。母だけが帰って来たときのままで、茶のヘリンボーンのスーツ姿だった。

三人は僕を真ん中に、仲の良い家族そのままの格好でソファーに並んで座っていた。

目の前の床には、素っ裸のMが横たわっている。

彼女は僕が縛ったままの縄を身に着けたまま、後ろ手に緊縛された不自由な裸身を明るい光の中に晒している。膝を曲げてあお向けに横たわる裸身はウェストで捻れ、幾筋かの鞭痕の残る白々とした尻が僕たちに向いていた。

麻酔薬で寝入った彼女の縄目を解く事を、どうしても母が許さなかったのだ。

父はもちろんの事、僕も当然、怒りに燃えている母の仕打ちに異議を挟むことなどできなかった。

無惨に黒い麻縄で緊縛されて寝入る裸身が、穏やかな呼吸とともに微かに上下する様はとても美しい。柔らかでしかも、ぴんっと張り切った真っ白な肌が、様々な表情で微かに揺れ動いている。見ている僕がその肌の中に、まるで吸い込まれて行ってしまいそうな幻覚を覚え、思わず生唾を飲み込んだ。

「タヌキ寝入りじゃないの。もう覚めてもいいはずじゃあないですか」

いら立った声で母が言った。

「個人差があるから何とも言えないが、呼吸から見て、特に悪い副作用はなかったようだ。本当に良かったよ」

「何が良かったですか。きっとタヌキ寝入りに決まっているんだ。試して見ればすぐ分かるわ」

ほっとさせる父の言葉を憎々しげに遮った母は、黒い皮鞭を右手にぶら下げて立ち上がり、横たわるMの前に立った。

大きく鞭を振りかぶり、ゆったりと上下している彼女の尻めがけて力の限り打ち下ろした。初めての鞭打ちはうまく決まらず、ベタッという締まらない音が高い天井に吸い取ら

れていく。

どれほどの痛みが襲ったか知れないが、鞭の刺激で身じろぎして目を開けた彼女は辺りを見回し、やがて僕たちに焦点の合った目で「みなさんおはよう」と、にこやかに言ったのだ。

彼女の元気な笑顔に、つい口元がほころび掛けた視線の隅に、怒りに肩を振るわせている母の姿が映り、たちまち笑みも凍り付いてしまった。

ピシッと、今度は正確な鞭が肩先で鳴り、白い肌に真っ赤な筋が走った。

「打たないでください。先ず私の話を聞いてからにしてください」

床に倒れたまま静かなアルトで母に話し掛けたMは、後ろ手に緊縛された不自由な裸身で起き上がろうとする。彼女のけなげな姿を見て駆け寄った僕は、肩と腰に手を当てて素早く起き上がらせた。

僕の介添えで片膝を付いて起き上がった彼女は、長い足の筋肉に力を込めてすっと立ち上がり、黒縄で縛られた豊かな乳房を押し出すように胸を張った。前に立つ母よりも頭一つ背が高い。

「あなたの話なんて聞きたいとは思わないわ。先ず、今日の始末を着けなければなりませんからね。そうでなければ、家族に対する私の体面が立ちません」

母の威厳を付けた言葉に動じる風もなく「私のこの姿を見ればもう、始末は着いたのじゃないですか。それに、体面を保たなければならない家族なんて窮屈すぎて叶わないと思いますよ。私は、体面など必要としないものが家族だと思っていましたから」と言っただけなのだ。

「あなたの、その姿のことだけど、議論をするための衣装じゃないって事はもう、賢明なあなたには分かっているはずよね」

意地悪く一步下がり、Mの裸身をこれ見よがしに上から下まで見つめた母は、さり気なく彼女の背後に回った。

「あなた、ずいぶん変わった尻尾をぶら下げているのね。何に使うものか教えてくれないかしら。私が帰る前にきっと使っていたはずだもの、見せてもらう権利はあると思うわ」

母は、僕が縄尻で作って彼女の体内に挿入した二つの縄の結び目に注目した。ウェストの背後から垂れ下がった縄の途中で、二つの結び目は淫らに揺れていたのだった。

「分かりました。私の話を聞く耳は持たないと言うのですね。あなたの気持ちは分からなくはないし、立ち会っている男たちも口ほどにもないお坊っちゃんたちだという事も分か

りました。気の済むまで、存分になぶってください」

一瞬僕は顔が赤くなり、服を着ていることが恥ずかしくなっていて、父の横顔を盗み見た。しかし父は、平気な顔でゆったりとして母と彼女のやりとりを見ているのだった。

「ええ、存分にさせてもらうわ。尻尾の使い方を教えてちょうだい」

「分かったわ」と言いながら膝を折って正座した彼女は、両の膝先でバランスを取って頭から床に向かって前屈した。床で強く頭を打たないように、緊張して沈み込む裸身の下で、筋肉が美しく躍動する。

ソファーに向けて横顔を床に着けた彼女は、両膝を広く開いて形の良い尻を高く宙に突き出す。

「いいわよピアニスト。結び目を入れてちょうだい」

言われるままに僕は、高く掲げた尻の後ろに屈み込み、二つの結び目がある縄尻を手にとった。

小さい結び目を肛門に、大きい結び目を性器へと、指先で粘膜を割り開いて挿入しようとするど、

「うっ」とMが下半身に力を入れる気配がした。目の前の鮮やかなピンク色の肛門と性器の入り口が微かに震えて広がり、二つの結び目を器用に体内に呑み込んでしまった。

僕の介助で再び正座した彼女は、身体を縦に割った二条の黒い縄を陰毛の中に埋没させた裸身を伸ばし、首筋を真っ直ぐに立てて母に言った。

「これが使い方です。あなたもお試しになりますか」

「いえ、結構ですよ。でも、よく分かりました。肌に密着した衣装がお好きなようね。それに、とても薄着好きで暑がりなのでしょうよ。とっぷり身体を冷やさせて上げる。ついでに熱にのぼせきった頭と下半身もね」

サディスティックな笑みを浮かべた母が、Mを見下ろしてゆっくりと言った。後ろに従うケンが一声、ワンッと吼え、正座した彼女の裸身がびくっと震えた。

## 8 逆さ吊り

僕はまるで、時代劇に出て来る牢番のようだった。

シニサロのモトクロス用の手袋をした右手に、黒い麻縄を握っている。縄の先は、前を歩く素っ裸のMの腰を二巻きした縄に繋がっていた。彼女が歩みを進める度に、白い尻が怪しく揺れる。尻を割った二条の縄の結び目が、性器と肛門に押し込まれているせいか、苦しそうに尻を振って一步一步を慎重に進める。歩む度に尻の筋肉が、きゅっと収縮するさまが僕の淫らな性感を刺激する。

Mの歩みに連れて柔らかな粘膜をなぶる、性器と肛門に挿入された結び目は、どんな痛苦と恥辱を彼女に与えているのだろうか。僕は、自分の肛門をえぐった縄の感触を、ざらついた痛みと狂いたくなるような恥辱とともに思い出した。

揺れる尻の上には、後ろ手に交差された両手首が緊縛され、首筋近くまで高く持ち上げられている。固く握られた両手が寒さの予感に、微かに震えたようだった。

こころなし、首を下げて歩く全裸のMの前を、暖かそうなクロテンの毛皮のコートを着た母が、手に黒い鞭と縄の束を下げ、ケンを引き連れて自動ドアへと向かう。僕の後ろからはエディーバウアーのダウンジャケットで身を固めた父が続いているはずだ。

厳寒向けの重装備の一団の中で、素っ裸のMだけが場違いな存在だった。

自動ドアの開く音と「うー、寒い」と言う母の声に乗って、強烈な寒気が頬を打った。目の前で、Mの裸身がブルッと震える。

躊躇することもなく、母とケンは漆黒の屋外に出て行く。毅然とした母の背中に急かされるように外に出た僕の目には、ぼんやりした街灯の明るさしか見えなかった。

ブーツを通して、さくさくした雪の感触が伝わって来る。

目が暗闇に慣れると、外は意外に明るい。街灯に反射する雪明かりで、新聞が読めると思われるほどだった。

風はなく、大きな雪の結晶が音もなく、ただ深々と舞い落ちて来る。

静かだった。

すべての音を吸い取って積もる雪は、凍て付く寒さの中で綿菓子のように湿気のないパウダースノーになっていた。でも寒い。羽織っていたパーカーの襟を合わせ、Mを見つめる。彼女の裸身は雪よりも白く見えた。小刻みに震えながら小さな歩幅で歩む白い肌に、

雪が舞い降りる。黒々とした髪はもう、うっすらと白くなり掛けていた。僕は慌てて縄尻を捨て、パーカーを脱ぎ、フードを立て、緊縛された裸身を頭から覆った。

「余計なことをするんじゃない。その女は覚悟を決めているんだから、あんたの出る幕じゃないの」

振り返った母に怒鳴られて身をすくめ、パーカーを情けなく剥がした。頭に深く掛かったフードを外すとき、彼女と目が合った。寒さに凍えきって固くなった頬に、無理矢理微笑みを浮かべようとした震える口元で、ゲランの赤が鮮やかに僕の目に映えた。

「だいじょうぶよ」と、彼女の唇は動いたのだ。

そう、Mは大丈夫に決まっている。彼女は憧れのプリマなんだから。

僕は大きく身震いし、前に行く母に分からないようにして彼女の肩先に唇を当てた。凍る肌で唇が痛み、舌先で解けた雪に彼女の香りが混じった。

「ごほん」と、後ろで父の空咳が聞こえた。見られたっていいと僕は思った。身悶えするほど羨ましがればいいのだ。

いつの間にか、前を歩く母との間が開いた。僕はできるだけMの身体に密着するようにして、裸身に降り掛かる雪と寒気を妨げようとした。僕の体温をいくらかなりとも彼女に感じ取られたいと、ただそれだけを思い、のろい歩みがますます遅くなる。雪を踏みしめる素足はきつと、感覚を無くして凍り付いていると思うと、母の仕打ちが恨めしく、抗議一つできなかつた自分が責められてならなかつた。

「早くしなさい」

数メートル先の梅の木の前から、母の鋭い声がとんだ。降り続く雪のため、はっきりとは見えないが、母は二本の梅の木に挟まれ、疎水越しに光る街灯をバックにした黒いシルエットで、足を開いて立っていた。もっこりした毛皮のコートが黒い雪だるまのように見える。十センチメートルほど足が沈み込む、深々と積もった雪に足を取られ、ふらつきながら母の前に進んだMに「正座しなさい」と、冷たい声が命じた。

「凍えきってしまうよ。もう許してやってよ」

母の指示が聞くに耐えられず、泣きそうな声で僕が頼むと、

「黙っていなさい」と、毅然とした声で応えたのは、母ではなく彼女だった。

静かに膝を折り、雪の上に端然と座ったMの裸身を見下ろし「この寒さに素っ裸でいても、まだ頭が熱いよね。十分頭に血を上らせてから冷やした方がいいみたいね。一石二鳥のやり方で熱を冷ましてやるわ。足を開いて、雪の上に仰向けになりなさい」と母が命

じた。

傲然と母を見上げてうなずいたMは、正座のまま後ろに倒れ、長い両足を大きく横に開いた。積もった雪が身体を優しく受け止め、白々とした裸身の半ばが、雪に埋もれた。

黒い縄を持った母が彼女の足元に屈み込み、足首に厳しく縄を縛り付けていく。

両方の足首に縄をくくりつけた後、左右の縄を分けて父と僕に持たせた。Mの裸身を逆立ちにさせて、二本の梅の木の間で吊せと言うのだ。

「あなた達は、私の指示に逆らえるほど、立派なことをやっていたの。早く、この女を吊しなさい」

縄尻を持ったまま、互いに躊躇している父と僕に叱声が飛んだ。

仕方なく二人は左右の梅の木に別れ、手頃な枝目掛けて縄を投げた。木と木の間は二メートルは離れていない。父と僕は互いに顔を見つめ合って呼吸を合わせ、できるだけ彼女に苦痛を感じさせないようにバランスを取りながら、縄を引き絞っていった。

宙に吊り上げられるMの重みで枝がたわみ、降り掛かる雪に梢から落ちる多量の雪が混じった。左右に押し広げられた股間を落ちた雪が被い、痛々しく股を割った二本の黒縄を白く覆った。

空に向かって両足を開いたまま、二本の梅の木の間で逆立ちに吊された彼女は、頭の半分ほどが降り積もった雪の中に埋もれた。

その姿はまるで、純白の若木が雪を割って生え出したようだった。樹皮に絡み付く黒いツタのように、裸身を縛った麻縄が凶々しい。

「これで全身の血が頭に降りれば、生意気で淫乱な頭を完璧に冷やさせることができるわ」

満足そうに言った母は皮鞭を取り上げ、彼女の正面に立って一閃した。

大きく開かれた股間を鞭先が厳しく打った。ビシッとくぐもった音が雪に吸い込まれ、無惨に押し開かれた股間の雪が激しく舞った。白い衣装を剥がされた股間に、黒々とした陰毛と、縦に身体を割った黒縄が残酷に姿を現す。

また鞭が一閃された。今度は鞭先が股間を越えて尻に届き、ピシッと鋭く皮膚を打つ乾いた音が耳に響いた。鞭音は続けて五回雪原に鳴り渡り、吊り下げられた裸身が雪の中で揺れた。

「代わって打ちなさい」

顔をほてらせた母が白い息を吐きながら、手に鞭を持たせる。押し返して首を振り、子

供みたいに嫌々をすると風向きが変わった。

「やはりチチが見本を示してからよね」

数歩離れたところで、部外者のように立ち会っている風情の父に、母が鞭を突き出す。

「まさか、あなたまで嫌とは言わないでしょうね。一番の当事者なんだから。はっきり、けじめを着けていただきますよ」

黙って近寄った父は、皮鞭を受け取った途端、無造作に振り返りざま一閃した。鞭先が下方に流れ、右の乳房を激しく打った。黒縄で菱形に緊縛され、くびれて突き出された豊かな乳房の上に、ツンと立った乳首を中心にして赤黒い鞭痕が残った。

次の鞭は臍の上に飛んだ。滑らかな腹に痛々しい鞭痕が残る。

Mは歯を食いしばったまま耐え、悲鳴を上げようとしめない。

「これでいいかな」と、つまらなそうに言った父が皮鞭を投げてよこした。

反射的に手に受けた僕は、彼女の肌を裂いた鞭に頬を当て、舌で舐めた。微かに血の臭いを嗅いだような気がして目を落とし、彼女の顔をうかがう。

頭の大部分が雪に埋もれ、逆立ちした彼女の目が僕に注がれていた。大きく開いた瞳は澄み、眼差しは優しくかった。僕は小さく頷いてから、鞭を大事に抱え、彼女の後ろに回った。

彼女はきっと、正面から鞭打つ姿を見ていたはずだと思ったが、どうしても僕は耐えられなかったのだ。また、彼女が見えるところに鞭痕を残したくもなかった。

目の下に大きく開かれた豊かな尻があった。白い裸の尻の左右に、しなやかな両足が大きく開かれて吊られている。股の間に、背中を曲げた父と母の姿がやけに小さく見えた。

僕は大きく皮鞭を振りかぶり、尻の右側に振り下ろした。返す鞭先で続けて尻の左側を打った。鋭く二度鞭音が響き、彼女の口から「うっー」と、低いうめき声が漏れた。黒い縄が食い込んだ尻の割れ目の、左右の美しい球面に二本、鮮やかに赤い筋が残った。

彼女はなぜ、僕が打ったときだけ声を上げたのだろうか。不思議だった。でも、うれしかった。「理不尽な舞台の上で、辛うじて僕の気持ちに通じた」と思ったかった。

「寒くて仕方がないわ。中に入りましょう」

乾いた声で母が言った。

その言葉を待っていたように僕は、Mを解放しようと、足を吊った梅の木へと駆け寄った。

「その女はまだ晒しておくのよ。頭を冷やさせるんだから」



鋭い叱声を浴び、幹に繫いだ縄に手を掛けたまま、僕は冷たく押しとどめられてしまった。

「この寒さだ。三十秒は持たないよ」と父が冷たく言う。

「三十秒ですって。とんでもない。五分間よ。決めましたからね。五分間そのまま晒して置くのですよ。チチもあなたも分かったわね。いらっしゃい」

僕に向かって言い放った母は、そのまま蔵屋敷の方へ足早に去って行く。ケンが母の周りをうれしそうに飛び跳ねながら、後に続く。仕方なく僕も肩を落とし、とぼとぼとMを残して歩く。寒い。

彼女はまだ、寒さを感じる感覚が残っているだろうか。

考えながら歩き、自動ドアの前まで来て振り返ると、街灯の青い明かりの中に舞う、灰色の雪の中にはっきりと逆さ吊りの裸身が見える。一面の雪景色をバックに、きめ細やかな肌の感触さえ分かるほど鮮明に、彼女が見えた。

「早く入りなさい」

母の呼ぶ声を無視し、雪の中で棒立ちになって目を大きく見開き、僕は異様な光景を見つめていた。

Mの傍らに残っていた父が、やにわに服を脱ぎ始めたのだ。

ダウンジャケットを脱ぎ、オーバーオールを肩脱ぎするや、パンツごとずり下げ、ブーツとともに脱ぎ捨ててしまう。残ったセーターをシャツと一緒に脱いで素っ裸になった父は、逆さ吊りのMの顔を跨いで身体を抱きすくめたのだ。

彼女の顔の上に、父の尻がのし掛かっている。

雪明かりの中で音も聞こえず、深々と降る雪の中で演じられた無言劇に僕は度肝を抜かれた。

凍えきったMの身体を温めようとする気持ちは良く分かるのだが、父の行動はやはり、父ならではのものだった。

「ずるいっ」と内心、叫んではみたが、もう手遅れだった。

やみくもに駆け出してみたが、気が急ぐばかりで雪に足を取られ、短い距離なのに何回となく転んだ。

全身雪まみれになって駆け付け、父の背に「チチはあんまりだよ」と泣き声で叫んだ。

目の前に、父の大きな裸の背中があり、尻の下に彼女の髪が見えた。

「後三分だ。おまえも脱げ」

背中を向けたまま、父が怒鳴る。

僕は慌てて服を脱ぎ捨てた。素っ裸になった全身が瞬時に凍える。大きく身震いをして這うように、Mの背後に回った。

飛び付くように、吊り下がった裸身にぴったりと張り付く。

凍り付いた鉄板に抱き付けばこんな感じになるかと思われる冷気が、素肌を突き刺す。余りの冷たさに頭が空白になり、ただ狂ったように尻の割れ目に顔を突っ込み、舌を伸ばして陰部を舐めた。

両手は高く伸ばし、左右に割り開かれた凍える両足をまさぐる。涙が止まらないほどに溢れ落ち、鼻水がしきりに流れる。股間をはい回る口に溢れた唾とともに、彼女の陰部に吸い込まれて行った。

凍り付いた、永遠に続くような時間が過ぎ、あれほど冷たかった彼女の身体が、吹きっ晒しの僕の背中に比べ、いとおしいほどに温かく感じられて来たとき、

「さあ、五分経ったぞ。Mを下ろせ」と父が叫んだ。

凍える指で木に縛り付けた縄をほどこうとするが、うまくいかない。ドジな僕より父の方が解くのが早く、彼女は片足吊りの捻れた格好でぶら下がってしまった。駆け寄って来た父に押しのけられた僕は、Mの裸身の前に屈み込み、片足吊りの不安定な裸身を両手で抱え上げた。途端に、残っていた縄を父が解き放つ。落ちて来た裸身を、僕が受け止めることになったのだ。

「ざまあみろ」と内心ほくそ笑んで、彼女を強く抱いて立ち上がった。温かな肌と冷たい肌が交互に、僕の胸から腹に感じられるのがうれしい。

僕は彼女を抱いたまま、降り積もった雪の中を慎重に歩く。

世界中の人に見せたいくらいにヒロイックだった。素っ裸の僕が、全裸で後ろ手に緊縛されたとびっきりの彼女を抱いて、雪景色の中を歩いているんだ。プリマを抱く僕がヒーローじゃあないなんて、誰にも言わさない。

おまけに彼女は、小さな声で「ありがとう」って言ったんだ。こんな過酷な状況の中でも、僕のペニスはすぐ大きく勃起した。歩く度にペニスの先に、冷たい尻が触れる。なんてすばらしい気持ちなんだろう。たまらなくなってきた僕は腕の力を緩め、彼女の尻がもっとペニスに触れるように、抱き方を変えた。

直立する熱いペニスを、冷たい尻が密着したまま圧迫する。

僕は、三歩歩くのが限度だった。凍り付く寒さの中で全身が痙攣した後、僕は感極まっ

て射精した。その拍子に、慎重に歩いていた足を雪に取られ、彼女を抱いたまま後ろにひっくり返ってしまった。

「ばーか」と嘆くMの声が、雪に倒れ込む不快な感触の中で耳に残った。もちろん、僕に異論はなかった。

## 9 狂乱家族

氷みたいに冷たく、身体に積もった雪さえ凍り付いているMの裸身を抱いて、父に指示されるまま、蔵屋敷の隅にしつらえてあるユニットバスへ向かった。

部屋を横切る間、ヒーターのよく効いた室温が暖かく僕たちの裸身を包んだが、彼女の冷え切った身体は、固く凍えきったままだ。

プラスチックの薄っぺらなドアを押し開け、バスタブの中にそっと彼女を座らせる。青白く凍えた肌に、皮膚を噛んで縦横に走った黒い縄が痛々しいが、後ろ手に緊縛された姿のまま下ろし、父の命ずるままに低い温度のシャワーを全身に浴びせた。

「ゆっくり、まんべんなく、時間を掛けて湯を掛けるんだ」と父が指示する。

五分間くらい、ぬるい湯を掛け続けると、青ざめた肌が薄いピンクに変わってきた。緊張し縮こまっていた肌も、柔らかくリラックスしてくる。なんとも言えぬ官能的な、甘い香りさえ漂ってきた。

「温度を上げて」と父が命じ、僕はシャワーの温度を四十度に上げた。湯の量は減ったが、もうもうとわき上がる白い湯気の中で、黒い縄に緊縛された肌が豊かに膨らみ、赤く輝いてくる。

熱いシャワーを、二分間ほど浴びせ続けたとき、

「ありがと。もういいわ」と言って、彼女が立ち上がった。

Mは全身から湯を滴らせ、黒い麻縄で縛られた豊かな乳房を前に押し出すようにして長い足を上げ、無造作にバスタブを乗り越えた。僕はシャワーを持ったまま、慌てて道を空ける。当然のようにうなじを上げ、彼女は傲然と座敷の中へ歩み出した。

呆然として後ろ姿に見入る視線の先で、ほんのりと赤く染まった尻がセクシーに揺れる。股間を割った二条の黒い縄が、やけに淫らに感じられた。

急いでシャワーを止め、すぐ振り返った僕と、やはり後ろを振り返ったMの目が合った。尻の筋肉を美しく緊張させた見返り美人は何も言わなかったが、いたずらっぽく笑った顔には、もう自信たっぷりの彼女が甦っていた。「まかせてよ」と言うように片目をつぶった後、彼女は三步前に進み、ゆったりとソファーに掛けた母に静かなアルトで言ったのだ。

「危うく死ぬところだったけど、冷え性になり掛かったところで済みましたわ。これで、奥様のいう始末は着いたと思いますが、いかがですか」

黙ったままの母に、なお言いつのる。

「あなたの気が済んだか済まないかは知りませんが、言いなりになった私に、この縄目は失礼ではありませんか。あなたの手で解いてください」

後ろ向きのMが身体を回転させ、僕に正面を見せた。後ろ手に緊縛された両手を尻と一緒に母に突き出し、僕の顔を見てまた片目をつぶった。

その拍子に彼女の尻で、大きく鞭音が響いた。

黒い鞭を右手に、仁王立ちになった父が、また鞭を一閃した。ピシッと高い音を立てて鞭が尻で鳴り、腰を後ろに付き出したままの裸身が大きく左右に揺れた。

「恥知らずなことを言うと、私が許さない。誰に捨てる命を助けてもらったと思ってるんだ。淫乱な身体からびしょびしょと湯を滴らせたまま、主人に尻を突き出すなど礼儀知らずにもほどがある。また雪の中で晒されたいのか。早くご主人様の前に這いつくばって許しを乞え」

言い終わると同時にまた鞭音が響き、「ひー」と大げさな悲鳴を上げた彼女が床に這いつくばる。大げさな身振りで身体の向きを変え、ソファーに掛けた母の足元に、頭を垂れて膝で擦り寄って行く。

また大人の時間が始まるのだ。

「本当にやってられない」と僕は、今度こそ呆れ返って声に出し、自分に言い聞かせた。このまま自動ドアを開け、部屋に帰ってしまおうとさえ思った。両親も救われないが、年寄りを構って遊んでいるMにも腹が立ってきた。

「私が悪いのです、どうぞ罰してください。尻を鞭打たれて初めて気が付きました。どうぞ罰として私に、奥様の美しい陰部を舐めさせて奉仕させてください。お願いします」

馬鹿なことを情熱的なアルトで訴えながら、素っ裸のMは跪いたまま母の股間に首を押し入れていく。隣で介添えをする父までが屈み込み、身動きしない母のスカートをめくり上げ、ストッキングと一緒にショーツを脱がせる。

されるがままの母は、いったいどうしてしまったのだろうか。あれほど冷静な母にしても、性の誘いは逃れがたいものなのだろうか。それともMに見せた過酷な仕打ちを悔やんでいるのだろうか。

僕はせわしなく、今日起きたことを思い返そうとした。

恐らく母は、僕の病気を気遣い、早めに帰宅した途端に三人の痴態を見る羽目になったのだ。父と子が繰り広げる浅ましく異常な饗宴を主催するMを見て、母は常軌を逸した興

奮状態に陥ったのだ。突然の激しい怒りにまかせ、雪の中に彼女を逆さ吊りにしてしまっただけに違いない。しかし、やはり異常としか言えない第二幕を主催することになってしまった母は、舞台の登場人物にならざるを得ない黙契を、雪の中で全員と結んでしまう事になったのだ。その筋書きを作ったのはMと父で、多分僕はお人好しにも、上手く利用されてしまったにすぎないようだった。

底の見た台本に乗せられてしまった僕は、まったくやっていられないと思うのだが、既にキャスティングされた登場人物だし、何よりもプリマの彼女を見続けていたがために、さもない未練を抱いて仕方なく蔵屋敷に残った。

僕は部屋の隅に家具のように立って、一切を見る。

Mは、剥き出しになった母の股間に顔を突き入れ、最高の技術で舌を使った。彼女の後ろ姿はまるで、燃えさかるセックスの権化のようだ。股間を黒縄で割られた尻を後ろに突き出し、前後左右に揺すりながら、全身の力を母の陰部へと集中させる。いつしか母の顔が苦しそうに歪み、荒い息づかいさえ聞こえてきた。いつの間にも服を脱ぎ捨てたのか、全裸の父が母とMに寄り添い、上を向いた母の口を吸いながら手を動かし、巧妙に服を脱がしていく。

全裸にされた母が、両足をMの左右の肩に乗せた淫らな格好のまま、唇に合わされた父の口の陰から「むー」と、ひととき高い声を上げた。

やっと母の股間から顔を離れた彼女が、濡れた口元を肩で拭いながら僕を振り返った。「あれ、ピアニストだけが服を着ているのね。恥ずかしくはないの」と声を掛けたのだ。もちろん僕は恥ずかしかった。しかし、決して服を着ているからではなく、服を着ていない三人の性への執着が恥ずかしかったのだ。

「ピアニストには、もう言ってあったはずよね。男女の間には何でも有りだって。何を恥ずかしく思うことがあるの。君のチチとハハなんだよ。それに…。ひょっとして君は、私が嫌いになってしまったのかな」

黒縄で縛られた豊かな乳房を僕の方へ向け、母の愛液でぬめぬめと光るセクシーな唇をちょっと突き出して彼女が言う。ついさっき全身で感じた裸身の柔らかさを思い出す。僕はもうたまらない。

神を信じていない僕が許しを乞うものなど、父と母ぐらいしか思い付かないが、その両親がこんな状態では知ったことではない。僕は、そそくさと服を脱ぎ、屹立したペニスを

恥じることもなく正面に晒して、全裸になった。

「皆さん。恥ずかしがり屋のピアニストを罰して上げて。縛り上げて私と一緒に晒し者にしてください。その子は私にペニスを突き入れたくて仕方がないのだから、絶対にできないように繋ぎ止めるのよ」

びっくりしたことに、Mの演説にすぐ反応した父と母が、麻薬にでも侵されたように俊敏に、僕に迫って来た。

父が僕を床に押し倒し、両腕を背中にねじ上げる。黒い麻縄を持った母が後に続き、厳しく縛り上げる。

三人の家族が、ともに素っ裸で性に狂っていた。

両腕の痛みを抗うように、床に押し付けられた顔を上げてMの様子をうかがう。彼女は黒縄に緊縛された素っ裸の身体で両足を開いて立ち、股間に食い入る二本の縄の間に挟まれた黒々とした陰毛を揺るがすようにして、声もなく笑って僕を見下ろしていたのだ。

両親の手で僕は、Mと背中合わせに緊縛された。後ろ手に縛られた僕の両腕の上に彼女の両腕があった。僕の背が低いのではなく、彼女の両腕が柔らかいため、首筋近くまで高く組み合わされているのだ。やはりプリマには、叶う術もない。

しかし、二人の尻は同じ位置にあった。彼女の足が長いことを認めるのにやぶさかではないが、僕はうれしかった。彼女の呼吸や身動き、それらのすべてがダイレクトに僕の尻に響く。彼女の温かい尻の感触を感じるだけで、ペニスはもう爆発しそうだった。

両親にMが命じたわけではないが、僕の身体にも縦縄が走っていた。肛門に無理矢理挿入された縄の結び目を作ったのはきっと父だろうが、即座に肛門を割って挿入した母の実行力も大したものだった。僕と彼女の股間をそれぞれに割った縦縄は、二人が身体の向きを変えられないように、相互にきつく連結されていたのだ。

「どうもご苦勞様でした。皆さん方は皆さん方で、旧交を温め合ってください。私とピアニストは、皆さんのお仕事が無事終わるまで神妙に晒し者になっています。もちろん背中合わせに緊縛されていますからセックスの心配は入りません」

まるで競技会の選手宣誓みたいにMが宣言すると、即座に父が動き出した。

父は母の背後に回って両手を取り、黒い縄で後ろ手に縛り始めたのだ。目を丸くして見つめているうちに、全裸の母は僕たち同様、菱縄後手縛りの姿に緊縛されてしまった。縄目の所々に余った脂肪がくびり出されている裸身に、股間を割って縦縄が走った。

「ひー」と言う、二本の縄に性器を挟み込まれた母の悲鳴が、無惨に僕の耳を打った。

後ろ手に縛り上げられたまま床に寝かされた母に父がまたがり、押し広げた股間に、ぎら付いた顔で迫る。

両親の痴態を黙って見下ろしていたMの身体が微かに震え、ぴったりと密着した尻を通して、彼女の官能がぴりぴりと伝わる。いつの間にか僕の尻も震えだし、共鳴し合った尻の感触が熱い官能の嵐となって、固く勃起したペニスから脳を中心へと何回も行ったり来たりする。

官能の高まりに連れて前後に腰を使いだしたMが、二人を繋ぎ止めた縦縄を奔放に引っ張る。その度に股間が強く縄で擦れ、肛門に挿入された結び目が隠微な刺激を痛烈に送信して来る。彼女の性器と肛門に呑み込まれた結び目もきっと、同じような刺激を与えているはずだと思うと、僕の官能はますます燃え上がってしまう。音になって聞こえる荒い呼吸を確かめ合いながら、僕は彼女の腰の動きに合わせて、また逆らうように尻を前後左右に振った。互いに背中合わせに縛られているにも関わらず、合わせた肌を通して一緒に、性の高みへと上り詰めていったのだ。

こんな風に性の絶頂を極めていいものだろうかと思ったとき、マスターベーションのことが脳裏に浮かんだ。

「セックスなんて一人でもできる事じゃあないか」と思い当たり、にわかにはペニスが萎え掛かったとき、急にMが歩き出した。

繋がれた縦縄が強く引かれ、股間と肛門に走る激痛に「うっ」と唸った僕にお構いなく、彼女は後ろ向きの僕を引きずって両親の側へと歩く。

後ろ向きに引きずられ、たたらを踏むようにして付いて行く僕はたまったもんじゃない。萎え掛かったペニスを見透かされたのかと焦り「どうしたんですか」と問い掛けると「君の両親を応援に行くのよ。年少者の努めってもんでしょう」と、わけの分からない答えが返ってきた。

Mの行動に付いていけないことを見透かされないように「チチは縛られるのが好きなのかと思ってた」と無理に言葉を重ねると「性に定番はないのよね」とあっけなく言い捨てられてしまった。

股間の痛みを止めようとして聞いた問に対する答えは、極めてシンプルだった。そう、性に定番はないんだ。きっと僕は、面倒くさい気配りの要らないマスターベーションを選ぶな。

「だめよ。早く付いて来なきゃ。君のチチとハハがピンチなんだから」



のろのろと引きずられる僕が一喝されたかと思って、ペニスが萎えきってしまったが、杞憂だった。

彼女が横に歩いたお陰で、ようやく視界に入った光景から舞台の進行が分かった。Mは、母にのし掛かったまま萎えてしまった父のペニスを救援に行くつもりなのだ。

まるで騎兵隊だな、と僕は思った。ビデオで見たジョン・フォードの古い映画を、今さらMに見せてもらいたくはなかった。

母の股間を割った縄をほどき、将に挿入しようとしたところで立ち往生してしまった父のペニスに、Mは後ろ手の不自由な格好で、しかも背後に僕を従えた異様な体勢のまま食らいついた。

しばらく彼女が舌を使い、立ち直った父のペニスはようやく、母にインサートできたようだった。後ろ向きの僕に見えるはしなかったが、中腰の苦しい姿勢に耐えきれなくなったころ、高まりを極める両親のくぐもった声が妙に新鮮に、すばらしく耳に響いて来た。何年振りのセックスなのかは知らないが、とにかく祝福するだけの価値はあると、十分に感じられた。

久しぶりに官能を極めたに違いない両親がその後、背中合わせに緊縛された僕とMにしたことといたら、お礼の気持ちがあったにしても、とても思い出したくないほどの凄まじさだった。何と、母が僕のペニスを口にくわえさえたのだ。

別にもう、僕はどうって事はないが、最後までMと普通のセックスができなかったことだけが悔やまれてならなかった。

やっぱり僕は、性を憎みながら一人で性に浸る方が性に合っているようだ。

「最近、蔵屋敷に顔を見せないね」

すっかり春めいてきた日差しを背に、白い歯を見せて笑うMの顔が窓枠の中に浮かんでいた。

窓ガラス越しにまた、伸びやかなアルトが聞こえる。

「歯医者さんがおもしろいものを作ったんだよ。私をずっと手放さないで置いておこうと考えたのよ。余りのひどさに笑いたくなるくらいおぞましい物よ。今夜ぜひ見に来てよ。たまにはいいでしょ。何てったって君の両親のすることなんだから、見る義務があるとおもうわ」

僕は机の前に座ったまま顔を横に向けて、ガラス越しに彼女を見ている。立って行って窓を開けようとはしない。逆光になった顔が、いくらか悲しそうに見えもしたが、関心のない目付きでぼんやりと外の景色に見入った。

あの雪の夜から、もう一か月が経っていた。

あれから彼女は蔵屋敷に住み着き、いつも両親の相手をしていた。両親にとっては、Mとの饗宴の時間を縫って診療や家事をしていたと言った方が、現状に近かったかも知れない。僕も行きがかり上、蔵屋敷に顔を出すべきだったが、あの夜の痛烈な印象を整理しきれないまま、彼女と会うことも少なくなっていた。ときおり診療所の受付のまねごとをしている彼女を見たり、たまに家族で囲む夕食の席で一緒になったりはしたのだが、僕の方から視線を下げてしまうのが常だった。

彼女に聞きたいことは山ほどあった。広告の仕事のことや、住まいのこと、そして両親と過ごす時間の意味についてなど、どうしても聞いておきたいことはあった。しかし、後二か月も経たないうちに、僕は都会の歯科大に行くことになっていたのだ。今さら問いただし、新しい生活を始める前に、どうしても整理しておかねばならない問題とは思えなかった。

ぼんやりと広がった視界の中で、静止したわびしい風景に溶け込んで帰って行く、Mの後ろ姿が揺れた。あれほど凄まじい感動を僕に与えた彼女の背は、少し小さく見えた。あの夜の痛烈な裸身に比べ、紺のチャネルスーツがやけに悲しい。

そのとき、怠けきって思考を停止していた脳の隅で、しばらくぶりにピアノの音が響い

た。完璧に弾かれるショパンのスケルツォが僕を笑った。

思わず立って行って、薄く埃の掛かったヴェーゼンドルファーの蓋を開けた。あれほど広いと感じられてきた八十八鍵のキーが、まるで箱庭みたいに小さく見えた。

おずおずと最初のAを置く。澄みきった音色が耳に美しく響き渡り、最初のパッセージをクレッシェンドに攻める。

忘れていた音の洪水が頭を走り、少し遅れて僕のピアノが、裏切りもなくその音を追った。まさにヴラヴィシモ。これがピアノっていうもんだと思い、涙がこぼれ鍵盤が滑った。エンディングで大きく外した音は、初めて会った彼女の前で外したあのFだった。途端に涙が止まらなくなり、メロメロになったスケルツォの音色から、彼女の悩ましい姿態が浮かび上がる。

ああ、そうなんだ。そうだったのだと、言葉にできないまま最後のDesをぞんざいに置いた僕は、ピアノの前で立ち上がった。喉元までこみ上げた発声できない言葉を持って余したまま、高々と勃起したペニスを解放すべく、服を脱いで全裸になった。

「すてきよ」と言う彼女の幻聴に酔いながら僕は、一人で夢見るようにMとのセックスを追った。

今けじめなくてはと思いながら、焦るように虚しい絶頂を極めた後、僕は決心し彼女の招待を受けた。もう後ろ姿も見えぬプリマに向かって、僕は大声で「今夜会おう」と叫んだのだ。

静まり返った大気を裂くロードスターのノイズが聞こえた。Mが市街地から帰って来たのだ。

壁の時計とにらめっこしながら待ち、きっちり一時間後に蔵屋敷へと向かった。なぜ一時間待たなければならないのか、はっきりとした理由はないが、一時間を掛けてすべての心構えをしたつもりだった。

とにかく僕は、このまま都会の生活を初めるわけにはいかないと思ったのだ。遠く離れて住めば、両親もMも、それほどの時も要らずに遠い存在になっていくことは分かっていたし、このままその時が来るのを待っているつもりだった。しかし、僕は思い直したのだ。家族も愛しい人も、みんな音楽のようだと、スケルツォを弾きながら思ったのだ。遠く離れば当然音は聞こえないが、一度聞いて耳を離れなくなった演奏は、時とともにその凄まじい感動を増殖させていくのだ。それが、決して逃れることはできない音楽の魔力なん

だ。僕はMに会って以来、すばらしいまでに淫らで寒気がするような音楽を聴き、自らプレーしてしまったのだから、身を引いて時の流れに身をゆだねれば済むことではなかった。時と場所が解決してくれる問題ではなく、きっと僕自身でエンディングの音を置くべきなのだ。その音を激しくフォルテで置くか、そっとピアノシモで置くかが今、僕に問われているのだと思った。

微かに西の空に明るさの残る黄昏の中、僕は黒いセーターとブラックジーンズで決め、蔵屋敷へと向かう。

ようやく咲き始めた梅の香りが艶めかしく漂い、鼻先をかすめる。目を上げると、すぐ近くの枝に楚々とかぼれる白梅の花があった。やはり彼女には紅梅が似合うなと思ったが、手を伸ばして枝を折り、壊れそうなほど薄く白い、小さな花に顔を寄せた。ふくいくと香り立つ白い梅の花にMのルージュがだぶり、真紅に染まる。花の香りが消え失せ、ゲランの匂いが彼女の体臭とともに甦った。すべての臭いを消したあの雪原に漂うMの匂いがまた、彼女が吊されていた梅の木から香り立つ。脳裏に浮かんだ凄惨な記憶に猛り立つベニス、スリムのブラックジーンズの中で泣く。だって、僕のプリマが待っているんだ。

白梅の枝を手にとって、自動ドアの前に立った。すっと開いたガラスドアに気をよくして、足早に控えの三畳間をやり過ごし、座敷の扉を開け放った。

目の前に広がる二十畳の座敷の中では、ひとつき前と同じ異様な光景が繰り広げられていた。

目に映った三人の男女は皆、素っ裸だった。一人は僕の父で、もう一人は母、そしてMは鎖に繋がれていた。

そんな三人が僕を笑って迎えている。荒廃しきった空気が押し寄せ、僕を覆い尽くそうとする。ぎょっとして、手に持った白梅の枝を床に落としてしまった。白く小さな花が、二つ三、足元に転がる。

ここで逃げ帰らねば、ひょっとして都会の新しい生活に入っていけなくなるのではという恐怖が、脳裏をかすめた。しかし、一切を見ること、見た物の中から判断し決断することが僕に課せられた義務だと思い、一心に目を見開いてすべてを見た。そう、それが僕自身に課した義務なのだ。

ソファーに二人で掛けてにやにやと、年相応に汚れた歯を見せている両親の裸身はみすぼらしかった。Mの裸身だけが生き生きと輝いている。

彼女はソファーの前の床に素っ裸で四つん這いになり、尻を高く掲げていた。いつの間

に折り合いが付いたのか、シェパードのケンが彼女の横で激しく尻尾を振った。僕を認めて、低くウーと唸る。まるでMを中心とした三人を守っているようだ。もう僕は、まるで異邦人のようだった。

白く光り輝く裸身を誇らかに晒し、四つん這いのまま微笑んでいるMの姿をじっと見つめた。

彼女の両手首は、五十センチメートルほどの銀色の手鎖で繋がれている。両足もまた、一メートルほどの間隔で太い鎖で繋がれていた。足枷となった鎖の中央からは別に一条、細い銀色の鎖が尻の割れ目へと伸び、足元で垂れ下がっていた。僕の位置からはよく見えないが、恐らく鎖の端は、肛門か性器に挿入された異物と繋がっているに違いなかった。

陰惨な光景を、また見ることになるのかと、うんざりすると「ずいぶん遅かったじゃないの。ご覧の通り、私はチチとハハの囚われ人になってしまったわよ」と、意外に愉快そうなアルトが耳を打った。

「せっかくピアニストが来てくれたのだから、皆さんが私の身体にしたことを、はっきり見てもらいますね」

新しい調度を客に見せるように、平然と言ったMが四つん這いのまま姿勢を変え、僕の眼前に大きく開いた裸の尻を向けた。

思っていた通り、薄いピンク色をした肛門から突き出した金属の棒に、鎖が繋がっていた。見開いた目を閉じるいとまもなく彼女が立ち上がり、足枷の幅一杯に足を広げた。卑猥に開いていた尻が閉じ、高く上がった美しい尻の割れ目から延びた銀色の鎖が、両足の間に渡された太い鎖の中央に繋がれている。股間に延びる鎖が短いため、Mは中腰のままだ。

あっけにとられ、状況の認識もできぬ僕に追い打ちを掛けるように、珍しく父が話し掛けた。

「やあ、久しぶりに蔵屋敷に来てくれたね。私たちはMに、一生ここにいてもらうことにしたんだ。犬に首輪が必要なように、彼女にも相応しい物をと僕が考え、ようやく完成させたんだよ。よく見て行って欲しいもんだね」

ほとんど理解を超えた言葉を一方的に発声した父が、厳しい声でMに命令を下す。

「息子によく見えるよう、足を開き、尻を上げて跪きなさい」

彼女は従順にうなずき、また四つん這いになって尻を高く掲げる。

肛門から突き出した金属の棒の端に父が鍵を差し込んで錠を解き、長さ十センチメートル

ほどの金属棒を引き抜いた。太さは二センチメートルはある。

「ほら見てご覧。鍵を回すと傘のように開くんだよ」

父が、銀の鎖の付いた金属棒の鍵を得意そうに回す。先の尖った金属棒の三分の二ほどが外に開き、直径五センチメートルほどの傘ができた。この傘が肛門の中で開いたのでは、どうやっても抜けるはずがなかった。

「言った通りでしょう。チチはいい物を作ってくれたわよ。お陰でウンチをするときも、君の両親に頼んで栓を外してもらわなくてはならないのよ」

意外に楽しい調子のアルトが、訴え掛けるように流れた。

「さあ、また装着するからね。お尻の穴を大きく開きなさい」

錠を回して傘を閉じた父が、陳腐な台詞を言う。

「はい」と、しおらしく答えたMは、四つん這いになった尻をより一層高く掲げる。

父は、左指で肛門の括約筋を押し開き、右手に持った金属棒の尖った先を慎重に中心に当て、恭しい手つきでゆっくりと、異物を肛門の奥へと挿入した。

もう僕は、ばからしさに笑う気にもなれない。両親もMも、いったいどうなってしまったのか。そっと、黙ったままでいる母の顔をうかがってみた。

母は苦虫を噛み潰したように、面白くもなさそうな顔付きで、父とMの成り行きを見つめている。いくらかは、当てに出来るほどの理性が残っているのかと思った瞬間。

「早くその女を繋いで帰ってきなさい」

父を叱責する厳しい声が飛んだ。

肛門に差し込んだ金属棒の鍵を回し、恐ろしい傘を彼女の体内で開いて鍵を抜いた父は、そそくさと母の元に戻って行く。

素っ裸のままの両親は、息子の前で、一切を忘れ去ったように抱き合い、緩慢な動きでセックスに励みだしたのだった。そんな両親の動きを横目に、鎖に繋がれたMが中腰に立ち上がった。肛門から延びた短い鎖が邪魔をして、真っ直ぐに立つことができないのだ。折れ曲がった裸身の前で、銀色の手鎖が悲しく音を立てた。

その哀れな格好を目にして、肛門の中で広がっている直径五センチメートルのおぞましい傘の感触が僕の感性に伝わり、肛門がきゅっと締まった。勃起したペニスの先がぐっと震える。

「ピアニストもこれでよく分かったでしょう。君の両親は私を虜にして、一生手放さないつもりなのよ」

「あなたはそれでいいんですか」と、僕は情けない質問を返してしまった。

「私は別に構わないわ。求められているんだから。今の状態で不満なことは、自由にウンチができないことだけよ」

「自由を捨てる価値があるということですか」

また陳腐なことを聞いてしまった。

「ピアニストはまだ、性の本質が分かっていないみたいね。自由だろうが不自由だろうが、性の喜びには関係ないのよね」

「でも、あなたにとって性の喜びがあるとは思えない」

「やっぱりピアニストの視野が狭いとしか言えないわね。性の喜びには何でも有りって言ったでしょう。ダイレクトに、ペニスを擦り付けて得られる喜びもあれば、想像力の高まりの中で得られる喜びもあるのよ」

「一人の方が想像力は高まりますよ」

「君のマスターベーションのことかな。確かにそういう面もあるけど、やはり人と人との関係の中にしか、本当の官能の高まりはないと理解した方が正しいのよ。多分煩わしくもあり、傷つくこともあるけれども、人と人とのせめぎ合いがあって初めて、性は淫らでおどろおどろしく魅力的なものになるものよ」

「あなたの鎖に繋がれた姿や、肛門に差し込まれた異物が理想的な性とは思えないな」

「ただの好みの問題よ。私は刺激的な方が好き。ただそれだけ。別に無理強いはしないわ。でも、私を哀れんだり恥ずかしいと思ったりはして欲しくはないの」

「あなたの言うことには、やはり無理がある。できることなら、僕は、大好きなあなたと、ごく普通に、愛し合いたいと願っているんです」

僕は頬を赤く染め、猛り立ったペニスに途惑いながら、しかし、はっきりと言ったのだ。

「そう、無理かな。でもいいや。鎖に繋がれた私の姿をよく見ておいて。そして、官能に燃え立つ身体をよく記憶しておいて欲しいの。私は誰にも独占されはしない。ただ、全身で楽しめる環境を求めているの」

Mが言い切ったとき、助けを求める父の声が彼女の名を呼んだ。

反射的に、鎖を鳴らしてMが急ぐ。思うようにならない父のペニスを、口に含んで廻らそうというのだ。

はっきりとMに問い掛けた、求愛に対する答えはなかった。

僕は分からない。息子を前に性の喜びを追う両親の姿は、考えようによっては微笑まし

くもあり、僕が自立さえすれば見過ごせることだとも思うが、それを手助けするMの異様な姿は、どうても容認できるものではなかった。

それが、官能のプリマのボランティアイズムなのか。僕には理解できない。なぜ彼女は僕に、二人だけの普通の性を与えてくれないのか。

寄る辺ない愚痴ばかりがつのり、微かに憎しみが芽生えた。

蔵屋敷の中で絡み合う素っ裸の三人を後に、出口の所まで行って振り返った、服を着た僕の目に、荒廃しきった光景だけが白々と寒く映った。



都会へ移り住む準備はすべて、僕だけでやった。

父も母も、Mとの性生活だけにかまけ、僕の学業ばかりでなく、毎日の暮らしにも構わなくなっていたのだ。恐らくこの三週間は、診療所も開けられることがなかったはずだ。この間、たまに一緒に囲む食卓などで、四人が揃うことはあったが、会話は弾まなかった。何か狂っているとしか思えなかったが、食卓のMは裸のままだった。

手鎖に繋がれ、足枷を付け、肛門から足枷の中央へと延びた短い鎖が、彼女を常に中腰にさせていた。椅子に掛けるときの彼女は、慎重にゆっくりと腰を下ろし、肛門から突き出した金属棒を、自分の体重で肛門の奥へと呑み込むようにして座っていた。そんな状況の中で、会話が進むはずもない。ただ、会う度に光を増して眩しくなる、場違いな裸身の美しさだけが怪しく魅力的だった。

それに引き替え、父と母の荒廃振りは、目を見張るものがあった。二人とも仲睦まじいことは結構なのだが、その異様なほどの痩せ方と憔悴の深まりは、目を被いたくなるくらいのものであった。確実に、何か不吉なものが進行している気配が感じ取られたが、それが何なのかは皆目分からなかった。

春が深まり、温かくなるに連れて一層、僕の周りの一切が冷たく寒く荒廃の度を深めて行くようだった。白々と輝きを加えていくMの裸身さえ、寒々とした痛みのような感覚を増幅させていた。

ヒーターも要らないほどに暖かな宵だった。

都会への旅立ちを三日後に控え、気持ちの高ぶりに眠れぬまま、ベットから起き上がり窓際へと立って行った。

僅かにカーテンを開け、外の闇をうかがう。

相変わらず裸のままのケヤキの梢越しに、暖かそうなまん丸の月が掛かっている。窓を開ければ、春の匂いが漂ってくるような、心優しくなる、懐かしい感情が足の先からこみ上げて来た。

幼いころ絵本で見たような、ほのぼのとした風景に漂わせていた視線の隅に、月明かりを浴びた蒼い影がかすめた。ぎょっとして、窓ガラスに額をぶつけて影の方を見ると、中

腰になって足枷を引きずり、よちよちと歩いて来るMの裸身が、月の光の中に浮かび上がった。

慌てて窓を一杯に開き、身を乗り出すと、冷たい外気が全身を打った。まだそれほど暖かいわけではない。

窓の下まで来たMは、肩で息をしながら僕の顔を見上げ、かすれたアルトで訴えた。

「部屋に入れてちょうだい。ちょっと相談したいことがあるの。いいでしょう」

もちろん構いはしないが、いつだって彼女の行為は唐突で、僕をどぎまぎさせる。

「早く下に降りて抱え上げてよ。私はこんな格好なんだから、一人では上がれないの」

一瞬僕は、ぽかんと口を開けたままでいた。窓から客を出迎えに行くなんて、考えたこともなかった。まったく彼女のすることはすべて、常識を外れている。

威張るように言う彼女の言葉に呆れながらも、僕は窓を乗り越え、素っ裸のまま地面に降りた。

本当に久しぶりに、素っ裸の僕のすぐ前に、素っ裸の彼女が立っている。あの雪の夜以来のことだった。僕はうれしくなり、大きく深呼吸した。

「あれ、ピアニストは裸で寝る習慣なの。いい習慣だね。でもペニスは小さいままなんだね」

場所柄を考えない彼女の言葉を無視して両手を広げ、中腰のままのMを抱きしめた。

冷たい肌の感触が心地よく僕の裸身に張り付く。即座に勃起したペニスを振り立て、腰を沈め、中腰になった彼女の陰部へと突き立てる。行きすぎたペニスの先が、肛門に挿入された金属棒から延びる冷たい鎖に触れた。ペニスが痛み、異様な現実がやっと、僕を包み込んだ。

ぎこちなく腰を引いて身体を立て直した。さりげなくそっと、うなじに顔を埋めようとすると、首に巻かれた首輪が目に入った。シェパードのケンに付けられていた皮の首輪が、ほっそりとした首にはめられていた。首輪から伸びた紐が途中で切れ、足元へぶら下がっている。

「歯で食いちぎって来たのよ。夜は後ろ手錠にされるから、歯しか使えないのよね」

僕の視線に気が付いたMが、素っ気なく言った。

身を引いて後ろに下がり、全身を見る。ケンの首輪の下に豊かな乳房があり、ツンと立った二つの乳首が並んでいる。なだらかな肩先が見えるだけで、胸を張ったままの両手は背中に回されていた。背後に回って見ると、ちょうど尻の上で、手錠が後ろ手に掛けられ

ていた。これでは、窓から上がれないどころか、横になることさえ大変なようだ。平気な顔をしている、彼女の神経を疑いたくなってしまう。

妙に白けた気分になったが、黙って頷き、尻に手を回して抱き上げる。剥き出しの尻の割れ目から延びる鎖が邪魔で、二回ほど抱く位置を変えた。

彼女を抱き上げるのも雪の日以来のことだ。しかし今夜は、それほどヒロイックな気分にはなれなかった。シチュエーションが違うだけではなく、何か、僕の身体の中で、異常な状況を拒絶する気持ちが芽生えたせいだろうか。

全身に力を込めてMの身体を窓に押し上げると、鈍い音がして、彼女は部屋の床に落ちた。

ヒーターを入れた僕の部屋は、急速に温まっていく。

明かりはつけない。窓から射す青い月明かりが、部屋の中をぼんやりと照らし出している。窓際のカーペットの上で、月光を浴びた白い裸身が横座りになっている。

「明後日はもう都会に行くのね」

下を向いたままMが、妙にしんみりと口を切った。

「できれば、あなたと一緒に来てもらいたいと思っています。でも、異様な格好をしたあなたでは嫌だ。普通のあなた、当たり前あなたと一緒に過ごしたい」

「今夜のことを言っているの。それは、だめみたいね。歯医者さんの執念のこもった肛門栓は、鍵がなければ抜けないのよ」

「そういう異様な言葉も、聞きたくないんです」

「ピアニストは、まだ大人の性が分からないのね。きっとナイーヴ過ぎるのかも知れない。悪いことではないけれど、もっと多くの事を知ること大事よ」

「あなたは、僕の好みの官能を高めることも出来るはずですよ」

「そうね。今回は優先順位が違ったけれど、そういう事も考えられなくはなかったわね」

「僕と都会に行ってくださいませんか。あなたなら都会でも十分生活できるし、僕もバイトをします。本当の官能の高まりを教えてください」

「官能は教えてもらって高まるわけじゃあないわ。自分で高めていくものなの。君の両親を見て見ればいいわ。誰が何と言ったって、自分たちの高まりの世界を離そうとはしなかったわ」

「どうしても、僕を愛してはくれないのですね」

「そういう問題じゃありませんでしょう。私はピアニストを愛しているわ。でも、好みに合わない性を押し付けられるのはごめんなのよ」

「じゃあ、今夜はどうして訪ねて来てくれたんですか」

「だから、相談したいことがあるって言ったでしょう」

Mはまたしばらく沈黙した。背後から浴びた月光で滑らかな裸身が青く輝き、まるで夜光虫と遊ぶ人魚みたいだった。後ろ手錠に緊縛され、肛門栓を避けるように横座りに座る全裸のシルエットが、陰惨な現実を越えて、僕を優美な夢へと誘う。

「実は、君の両親が私を殺すことにしたのよ」

「えっ」と言ったまま、僕は絶句した。

「はははっははは、そんなことはないですよ」

「本当にそう思う」

厳しい声が部屋中に響き、驚いて見つめたシルエットの中で、彼女の大きく見開いた目が一瞬赤く光った。

「ええ、多分、」と、口の中でもごもごと呟きながら、こんな真夜中に首輪に繋がれたロープを噛み切ってまでやって来た彼女と、日毎憔悴し、尖りきっていく両親の顔とを思い浮かべてみた。

ずいぶん長い時間考えてみたが、絶対に有り得ない事とは思えないような気になってしまった。

両親には申し訳なかったが、常軌を逸しすぎた、追い込まれた状況に身を置いてしまった二人が、短絡的に局面の打開を考える場合も有ると思ったのだ。

Mの言うように性には何だって有りなのだし、両親とMの間には性以外の関係はなかったのだから。

「詳しく聞かせてください」

覚悟を決めて、しっかりとした声で尋ねると「詳しいことなんか知らないわよ。君の両親のすることなんだから、私が知っているわけがないでしょう」と突き放す。

「それでは話になりませんよ。知っていることだけでいいんです。あなたの想像でも構わない」

話すことを整理するように、首輪のはまったうなじを傾けたまま目をつぶっていたMが、静かな口調で言った。

「ピアニストは、前の事件のことは知っているわね」

僕は黙ってうなずいた。彼女の過去が苦しかった。

「あのとき、築三百年の屋敷の主はカメラマンで、そのカメラマンが崖から海に身を投げた死んだのよ」

彼女に似合わない混乱した話し方の中に、彼女の特別な過去が込められているのだと思った。

「君の両親は明日、私をその断崖に連れて行くの。きっと、この姿のまま、私を海に突き落とすわ。これが私の知っているすべて」

何か、はぐらかされたような感じだった。

父と母と彼女が明日、日本海に行くのだという。確かにみんなが知っている事件の舞台になった日本海に、その当事者を交えて行くというのは尋常ではない。しかし、その同じ舞台上、両親がMを海に突き落とすという話しもまた、突飛すぎた。

「そこで相談というのはね、明日、ピアニストにも一緒に行ってもらいたいという事なの。歯医者さんたちが罪を犯さないように、私をガードしてもらいたいのよ」

変な成り行きになって来たと思っただけ。しかし、筋書きは完璧に出来上がっていて、僕が引く逃げ道はなかった。たとえ一瞬でも、両親がMを殺すという想定を認めてしまった僕の負けだ。

「一緒に行きますよ。ほかに方法はない」

「ありがとう。ピアニストはやっぱり優しいのね。でも、両親がだめと言っても来てくれないは大変なことになるのよ。そして、明日の朝は多分、君が寝ているうちに早く発つと思うの。眠っちゃだめよ。よく見張っていて、必ず一緒に行くのよ。きっと、当日の私の格好を見れば、私の言ったことが正しかったと分かるわ。素っ裸で手枷足枷をはめられ、肛門に金属棒を突っ込まれたままの姿で連れ出されるはずよ」

妙にねじ曲がっていく彼女の論理は聞きたくなかったが、僕は完全に出口なしだった。

「じゃあ、私は帰るから。寝ないで待っていてね」と言って彼女は腰を上げる。「僕が送っていきますよ」

「だめ。ピアニストはドジだから、きっと両親を起こしてしまうわ。その場で計画が変わり、君の目の前で殺されてしまうかも知れない」

「そんなことはないでしょう」

「いや、分からないわ。それよりピアニストはピアノを弾いてよ。チチとハハは意外に君のピアノが好きなのよ、きっと安心して眠りこけるわ。ぜひ、そうしてちょうだい」

仕方なく僕は、彼女をまた抱え上げ、窓からそっと地面に下ろした。

さっきより幾分傾いた月が、斜めに青い光をこぼす。その光を顔の半分に浴びたMが僕の顔を見上げて、いたずらっぽく片目をつむった。

彼女は素っ裸のまま中腰になり、足枷に足元を取られないようによちよちとユーモラスに、背中で繋がれた手錠を揺すりながら遠ざかって行く。

僕は疲れ切った神経を抱いて、律儀にピアノの前に座る。どこまでお人好しなんだろうと思いながら、埃の積もった蓋を開けた。さっと両手を出し、スケルツォを弾こうとしたが、そんな気分にはなれない。しばらく鍵盤とにらめっこをしてからそっとHの音を置いた。

ショパンのエチュードから「第三番ホ長調・別れの曲」を弾き始めた。珍しくゆったりと、恥ずかしげもなく感情を込めて彼女のためだけに、別れの曲を月明かりの中で弾いた。

白いセーターにホワイトジーンズと、白で決めて待っていた僕の耳に、ベンツの低いエンジン音が聞こえてきた。

まだ夜明け前だ。Mの言っていたことが一つ当たった。

慌ててコンバースのワンスターに両足を突っ込み、紐を締めるのももどかしく窓から飛び降りる。もちろん白のおニューの靴だ。今朝のアンダーは真紅のビキニ。気合いが入っていた。

眠らずに考え続けた結果。やはり彼女との最後の時に賭けようと思ったのだ。何が起ころうとも、二日後には都会に向かうつもりだった。

全力疾走で蔵屋敷へと向かう。

街道へと続くアプローチに走り込んだとき、左手に続く梅の木をヘッドライトで照らしながら、大きくカーブを切ったベンツが現れ、僕の直前で急ブレーキを踏んだ。

運転席のドアが開き、地面に立った父がじっと僕を見つめる。

「僕も連れてってもらうよ」

大きな声で叫ぶと、父の肩が大きく落ちた。すかさず後部ドアが開き、母が姿を見せる。

「だめっ」

僕の声に負けないほどに叫ぶが、知ったことではない。父が車から降りているのをいいことに、母と反対のドアに素早く回り込む。車窓越しに、鎖に繋がれた手がロックを外すのが見えた。

さっとドアを開け、身を滑り込ませ、ドアを閉める。シートに横になった身体を立て直すと、すっとMが身を寄せてきた。周りにも気を配りながら、さっと彼女の様子をうかがう。彼女は煤ぼけた灰色のポンチョのようなものを被っていた。ドアロックを外したときに乱れたのか、前がめくれ上がり、両手を繋いだ手錠と、股間から延びた鎖が目をつけた。ポンチョの下はやはり全裸だった。

Mの言ったことがまた一つ当たった。

車外に片足を踏み出したままの母が、父に歩み寄ろうと外に出たが、タイミング悪く父はもう、運転席に着いてドアを閉めてしまっていた。閉め出されてしまった形の母は無言のまま、しばらく外に立っていたが、ふーと大きく溜息を付いて車内に戻り、ドアを閉めた。

その間僕は、Mのポンチョの乱れを直し、ちゃかり右手を下に潜り込ませ、彼女の両手に握らせていたのだった。

手に触れる手錠の感触が痛々しかったが、ちょうどデルタの真上にある僕の手に、彼女の陰部から立ちこめる温気と、しっとりとした湿気が触れ、汗が滲み出しそうになる。汗は恐らく、微かに触れる上を向いた陰毛を伝い、彼女の体内に吸い取られるのだ。僕は時間が止まってもいいと思った。いい気なものだ。

「どうするんだい」

精気のない父の声が車内に響く。

「予定通りよ」

無感情な声で母が応え、月が落ちた漆黒の闇の中をベントが発進した。

予定通りと言う母の声が、もう一つのMの予言の正当性を認めるようで不吉だった。しかし、今日の僕はボデーガードなのだ。依頼者の利益は守らねばと、映画のケビン・コスナーみたいに眉間に皺を寄せようと頑張ってみた。だが、隣のMからは「すてきよ」と言う声は掛からず、微かに震えている股間が不吉な印象をさらに高める。

ひょっとして彼女は、本当に怖がっているのかも知れない。そう思うと射精しそうなまでに固く張り切っていたペニスまでが、急速に萎んでしまう。その時、僕の手を握った両手にぐっと力がこもった。なんて事はない、やはり僕が彼女に励まされていた。

春の夜明けが、西に向かって走る車を追い掛けて来る。

東の空が漆黒から紺、そして紫に変わり、山の端にたなびく雲が紅と灰色に交互に彩られるころには、目を上げて見る天空は一切が蒼天に変わり、巨大な青い屋根となっていた。

短時間に繰り広げられた色彩の魔術は、行く末分からぬ僕たちの旅路を彩る花火のように、僕らを歓迎しつつ、どこかで拒絶しているように思われた。

沈黙が支配した車内に、V八エンジンの眠くなる振動だけが低く響く。

いつしか高速道路に乗り入れたベントは、さりげなくスピードを上げて西に向かった。もう放っておいても時間の問題で、日本海に達して道が果てるはずだった。

Mの言った方角もまた、当たっていた。

やはり両親は、淫らに憔悴しきった生活にピリオドを打つため、Mを日本海に突き落とすつもりなのか。それとも、僕が彼女を守り通すことができるのか。

父と母が万一、Mを海に突き落とそうとしたとき、僕は本当に止めることができるのだろうか。

ボデーガードを気取ったつもりの僕に、様々な疑念が押し寄せて来る。

そんな不安にはお構いなく、時は瞬く間に流れ、車内に入り込む空気が北の海の香りを伝えてきた。

また負けるのだ。こうして僕は負け続けていくのだと、なぜか思った。特に自分の考えがあるわけでもないのに、思うにまかせぬ無力感に身を焦がした。救いを求めるようにMと握り合った手に力を込めた。

すぐ握り返された手に、車内の暑さを越えた懐かしいぬくもりを感じ、ふと「別れの曲を聴きましたか」と尋ねてしまった。

初めてベントの中で発せられた自分の音声が、車内にこだまするエコーのように何回となく耳に響いた。

「悲しい調べね」

か細いアルトが、真っ直ぐ耳に突き刺さる。

悲しい調べと言ったMの言葉が、頭の中で駆け回り、身体を鞭打つ。突き立ったペニスを皮鞭で一闪されたような痛みと衝撃が全身を襲った。僕のピアノよりきつと、今聞いた声の方が数倍悲しいものに相違ないと僕は思った。そうでなければ今、僕はここにいる資格もない。ひたすら煩わしさを避け続け、情けない気持ちを抱いてマスターベーションに耽るしかないと思ったのだ。

たまらなく身近に感じたMが愛おしく。「好きです。愛しています」と、デルタに置いた右手を握りしめ、指の間に入った陰毛を引っ張りながら言ってみた。

もう、両親の思惑も気にならない。鎖に繋がれ、肛門から金属の棒を突き出している、



彼女好みのファッションも気にならなかった。ただひたすら彼女が好きで、ペニスを突き入りたい気持ちだけが一心につのっていた。

「私もピアニストが好きよ」

期待した通りの答えに全身が震え、彼女を覆っているポンチョを引きむしり、輝く裸身に覆い被さっていった。

「お待ちなさい」

母の金切り声が響き渡る。

しかし、僕はシェパードのケンではない。待てと言われてそのままになったのでは、人間ではなくなると思った。少なくとも、一切を賭けて、ただ一人の女性と合体したいと決心した男のすることではない。

鎖に緊縛された身体に激しく挑んだが、狭苦しい車内で自由が利かず、肛門から続く鎖に、したたかペニスを打ち付け、射精してしまった。

「いつも元気なんだね」と言って頭を撫でるMの仕草に母を感じ、隔てて座る冷たい母を憎もうと思った瞬間、車が止まった。

顔を上げて前を向くと、フロントガラス一杯の海が広がっていた。深い緑色に染まる日本海が、上半分のコバルトの空の下で、朝日を浴びて輝いていた。崖っぷちで止まったベントのエンジンが、鼓動のように振動を伝えるが、僕の目は真っ直ぐ、広がりきった海に注がれたままだ。

ドアが開き、父と母が外に出て行く気配がした。潮の香りが車内に満ちる。

「あの人たちはね、私を突き落とす断崖を下見に行ったのよ」

遠くMの声が聞こえた。

僕の目には、緑色に悶える海しか映っていない。

「君の両親はいなくなったよ。早く鍵を取って、私を自由にして。たまには人目のないところでウンチがしたいじゃない」

広々と広がる海の前では、Mの声も煩わしい。あれほどまでに恋い焦がれた激情は、いったいどこに行ってしまったのだろう。

「どこに鍵があるんですか」と素っ気なく聞くと、前の運転席に脱ぎ捨ててある父のコートを、手錠を掛けられた両手でせわしなく指さす。

「そのポケットに入っているわ」

身を乗り出して取ったカーフのコートのポケットから、ちっぽけな鍵が出てきた。こん

なちっぼけな鍵を真剣に求めるMが、かわいそうでならない。

求められるまま、ちっぼけな鍵を彼女を拘束した手枷と足枷の錠に差し込み、緊縛を解放した。落ち着く間もなく、狭い車内でシートに四つん這いになり、剥き出しの尻が目の前に突き出される。幾分閉口しながらも、僕は大きく開いた肛門の肉襞から突き出している金属棒に鍵を差し込み、肛門内で直径五センチメートルに開いた傘を閉じて、鎖の付いた金属棒を引き抜いた。

「ありがとう」と言った彼女は、そのままドアを開いた。

フロントガラスに広がる海に向かって、伸びやかな裸身を踊らせて駆けて行くMが見える。あっけない幕切れだった。

彼女は剥き出しの尻を突き出したまま、お礼の言葉を言ったのだ。白く豊かな左右の尻と、割れ目ですぼまっていた真紅のつぼみ、挑発する性器と黒々とした陰毛。たとえトイレに行くとは言っても、僕の目に残して置くものは、ほかになかったのだろうか。

やはり僕は負け続けるのか。

ほんのりとしょっぱい、潮のような苦さが口中に溢れ、目の前には、ゆったりと波打つ海だけが残った。

しばらく時が経ったが、トイレに行ったはずのMは戻らず、もっと前に車外に出た両親も帰っては来なかった。

いわくある断崖で帰らぬMと両親が急に心配になった。

もう枷は外してあるとはいえ「チチとハハが海に突き落とす」という最後の予言が頭をかすめる。

増殖した不安に耐えきれず、慌てて車外に飛び出していた。

思っていたほど外は寒くなく、海から吹き付ける冷たい風と強い日差しが、季節の主導権を争うように綱引きをしているようだった。そんな、のんびりした気持ちが似合う断崖沿いの道を、急いで海へと降りて行った。

小石につまずき、僕が海に落ちそうになったとき、崖の上で吼えるようなエンジン音と、タイヤが小石を蹴立てる凄まじい音が鳴り響いた。

慌てて戻ってみると、崖から五十メートルほど離れたなだらかな丘の上にベンツが止まっている。運転席のドアが大きく開き、素っ裸のMが颯爽と、光の中に降り立った。

全身に浴びた強い日差しに、真っ白な肌が輝いている。

逆光の中で長い髪が海からの風に舞ってきらきらと光り輝き、きめ細やかな肌が美しく透けて見えるようだ。

最高の裸身だった。

いつの間にか、僕の回りに集まって来た父と母も、丘の上のMを眩しそうに見つめている。

「ごまーみろ。おまえらに殺されるわけにはいかないんだ。でも、本当に仲がいい家族で感心したよ。私が出る幕じゃあなかったみたいね。謝礼代わりにベントはもらって行くわ。それからピアニスト。情けないショパンをありがとう。絶対忘れないからね」

最高に澄みきったアルトが空と海に流れた後、ベントのエンジン音がひときわ高く断崖にとどろき渡り、僕たち家族が取り残された。

初めに父が笑い出し、僕が続いた。しまいにも高らかに笑い声を上げ、一瞬、断崖に笑い声が満ちた。

この笑いの中にMも混じっていたらと思うと、なぜか僕は悲しくなった。

Mに利用されきった自分を哀れむ気持ちはなかったが、いつかどこかで、大人になった僕を見てもらいたいという気持ちがつのった。

その時は別れの曲ではなく、最高のスケルツォを聞かせたいと思ったのだ。

完